
I・000・S インフィニット・オーズ・ストラトス

コントローラー・X

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

I・O O O・S インフィニット・オーズ・ストラトス

【Nコード】

N 6 0 5 9 X

【作者名】

コントローラー・X

【あらすじ】

女性にしか使えない世界最強の兵器、IS インフィニット・ストラトス。

しかし、世界で唯一ISを使える男がいた。

今、この世界に《誕生》した《欲望のIS》と男の物語が始まる。

プロローグ（前書き）

初投稿なので文章が目茶苦茶だと思いますが、暖かい眼差しで読んでくれると嬉しいです。

プロローグ

夜、とある高層ビルの会長室。そこには2人の青年と、椅子に座っている1人の男性がいた。

「明日がIS学園へ転校だったな、竜馬君」

椅子に座っている白髪混じりの男性の名は、黒木 白黒。日本に数多くあるISメルダ・ファウンデーション開発企業の会長である。

「はい、白黒さん!」

そして、返事をした黒髪の青年……龍東 竜馬は元気に答えた。

「いやゝもうすぐ俺の開発したISが日の目に出るなんて、こっちも緊張してきたなあ……」

白衣を羽織った青年……黒木 影宮はそう言いながら右手を胸に当てながら緊張していた。

「息子よ。竜馬君のISは……」

「これだよ」

そう言いながら影宮は、ポケットから直径3cm、厚さ6mmの銀色のメダルを取り出した。表に十字の模様、裏は三つ円が横に並んだ模様が描かれているメダルだった。

「待機状態になってるが、呼び出せばすぐに展開できるからな」

影宮はメダルを竜馬に渡すと、竜馬はメダルにある小さな穴に赤い

リボンを通して首に掛けた。

「……？そのリボンは……」

「あ、小2の転校する時に友達から貰ったんです。『いつまでも、私たちは友達だ！』って……」

竜馬は目を閉じて思い出していた。転校する事が決まりこの学校での最後の授業、ポニーテールをした女の子に友達の証として貰ったリボンの事を……。

「影宮さん、白黒さん、今までお世話になりました」

そして目を開けて、影宮と白黒に感謝の言葉を述べた。8歳に両親を亡くし自分を引き取ってくれた白黒と、実の兄のように相談に乗ってくれた影宮に。

「ハッハッハッ！竜馬君、長期休暇に入ったらまた戻って来なさい。ここはもう、君の家なんだからな」

白黒は笑顔で言うと、竜馬は「はい！」と嬉しそうに言った。

「アレが完成したら届けるから、それまではセルで頑張ってくれ。期待してるぞ」

影宮は竜馬の肩に手を置きながら言った。

「はい。これからもドロイドや武器の開発、頑張ってください」

「ああ、そっちも《オーバーズ》を頼むぞ」

「はい！」

二人は固い握手を交わし、会長室を出てそれぞれの部屋に戻っていた。

主人公設定（11/04訂正）（前書き）

主人公のプロフィールと設定です。

主人公設定（11/04訂正）

名前：龍東 竜馬 りゅうとうりょうま

年齢：15歳

性別：男

所属：1年1組

好き：大切な人や友達的笑顔、麺料理（パスタもOK）

嫌い：大切な人や友達を傷つかせる存在、ゴージャ

趣味：プラモデル、旅行

マイペースな性格だが、誰でも優しく接する事が出来る。
成績は中の上だが、なかなかの切れ者らしい。

身体能力は高く、天性の格闘センスを発揮させる。

千冬とは小さい頃よく遊んでもらっていた。

8歳の頃に両親を事故で亡くし、知り合いのIS開発会社「メルダ・
ファウンデーション」会長、黒木 白黒くろくろに引き取られる。

引き取られると同時に、今いた小学校を転校してしまった。

箒とは同じクラスの友達だったが、転校当日に箒はリボンを《友達
の証》として竜馬に渡した。

転校した学校では鈴、弾、蘭と出会い、親友になった。

中学校には通わず通信教育をしていた。そのため、白黒の仕事の邪魔にならないように着いて行き、世界中回った。

世界中を回った時に、鈴と千冬に再会している。

13歳の時オーストラリアで東と出会い「君にはISを使える才能があるね やったじゃん、ブイブイ！」等と言われた。

ある事件の後、会社にあるISを起動することができて世間に発表された。

01話【男とクラスメイトとIS学園】（前書き）

やっと1話の完成……のはずが、本文がめちゃくちゃな部分があったので修正しました。

01話【男とクラスメートとIS学園】

メルダ・ファウンデーション 駐車場

「竜馬、準備ができたぞ」

「ありがとうございます、影宮さん」

影宮は、愛用の黒ベンツに竜馬を乗せていた。

「ゲート前でいいんだな」

「はい。そこから担任の方が案内に来てくれるから大丈夫ですよ」

「そうか。じゃあ、出発だ！」

そして、二人を乗せたベンツは駐車場から出発した。

IS学園 ゲート前

「……まだかなあ」

影宮にゲート前まで送ってもらい別れて10分、竜馬は担任の到着を待っていた。

（IS学園の職員って、全員が女性だったな。担任も美人なのかなあ……）

そう思っていると、こちらに近づく女性に気がついた。黒のスーツにタイトスカート、すらりとした長身、よく鍛えられているが決して過肉厚ではないボディライン。

「あっ！」

竜馬はその女性を知っていた。白黒の仕事でドイツへ行った時に面識があったのだ。

「すまない、遅くなってしまったな」

「千冬さん！お久しぶりですっ！！」

竜馬は女性…織斑 千冬に笑みを浮かべてお辞儀をした。

「ああ、ドイツで会った以来だな竜馬。黒木会長は元気か？」

「はい。白黒さんも影宮さんも、相変わらず元気ですよ」

「ふっ、そうか」

千冬は軽く微笑むと、二人は歩き始めた。

「束に聞いたが、まさかお前がISを使えるとはなあ……」

「僕も最初は驚きました。2年前に束さんと会って、『君にはISを使える才能があるね よかったじゃん、ブイブイ!』って、急に言いましたからねえ……」

竜馬は束との思い出をしみじみとすると、千冬は小さく溜め息を吐いた。

「全く、束は相変わらずか。……その様子から見ると、基礎知識と訓練は十分そうだな」

千冬は改めて竜馬を見た。3年前の竜馬の体つきとは違い、がたいが良くなっていた。

「束さんの言葉から今に至るまでは、ISの勉強を中心にしましたからね。それにこれも」

そう言うと、竜馬は首に掛けてあるメダルを千冬に見せた。

「これが、お前の……っ」

千冬は何か言おうとしたが、教室の前まで来てしまった。

「まあ、後で話す。今はここで待機しろよ」

「はい、ちふ……じゃなかった。織斑先生」

竜馬は千冬を織斑先生と訂正して言うと、千冬は小さく微笑みをした。その後、千冬が教室に入りSHRが始まった。

（数分後）

1年1組

「それではSHRを終了する………と言いたところだが、ここでまだ自己紹介をしていない奴がいる」

そう言い終わると、クラス全員がざわめいた。

（入学式早々に転校生？ いったい誰だ？）

その一人、ポニーテールが特徴の女子……篠ノ之 箒は考えていた。

「入れ」

「はい、失礼します」

千冬は廊下で待たせている竜馬を呼ぶと、扉が開いた。
竜馬が入ると、まずクラス全員が固まった。

（え………？ あい………つは………）

そして、箒は目を見開いていた。

「自己紹介をしてくれ」

「はい。えっと…、龍東 竜馬です。よろしくお願いします」

竜馬はそう言つと微笑んで、軽く頭を下げた。

「「「「……………」」」」

「……………」」

だがクラスの反応が無く、竜馬は頭にハテナマークを浮かべたような顔をした。

だが次の瞬間……

「「「「……………」」」」

「き？」

「「「「キヤアアアアア！！！！」」」」

「ほわっ！」

突然の黄色い叫びに竜馬は後ずさりし、所々声が聞こえた。

「やったわ！男子よ男子！」

「しかもウチのクラス！」

「「竜馬くん！こっち向いて〜！」」

「凄くイケメンね！嫌いじゃないわっ！！！」

「あ、あははは……」

こんな場面に遭遇した竜馬も、流石に苦笑いするしかなかった。

「うるさいぞ馬鹿者共！……まったく。毎年、よくもこれだけの馬鹿者が集まるものだ……」

クラスを静めさせると、千冬は溜め息を吐いた。

「龍東、お前の席は篠ノ之の後ろだ」

千冬は窓際の席を見ながら言うと、竜馬は席に近づいた。そして筭と目が合うと、微笑んで言った。

「8歳の時以来かな。久しぶり、筭」

「あ、ああ……。久しぶりだな、竜馬……」

二人は握手をしようとした瞬間……

バシッ！

「あ痛っ！」

「喜びの再会は後にしろ」

竜馬の頭に出席簿が叩き付けられ、握手が出来なかった。

休み時間 屋上

1時間目の授業が終わり、竜馬と箒は屋上に来ていた。教室ではクラス全員だけではなく、2・3年の先輩も詰めかけていたため箒と話が出来ないの、箒を連れて屋上へとやってきた。

「8年ぶりかな、最後に会ったのって……」

「あ、ああ……そうだな……」

竜馬は話しかけたが、箒は顔を赤らめて頷いた。

「それにしても……」

「な、何だ」

竜馬は箒を見つめると、箒は更に顔を赤らめた。

「うん、やっぱり箒にはポニーテールが似合ってるね。可愛いよ」

「か、かわっ、可愛い！？嘘を言うなっ！……」

「ははっ。嘘じゃないよ」

「む、む……」

竜馬は微笑みながら言うと、箒は顔を真っ赤にして俯いた。

「あ。あとこれ……」

竜馬は首に掛けてるリボンを箒に見せると、箒は懐かしむように見ている。

「懐かしいな。まだ持ってたのか…」

「ああ。友達の証を無くすなんて、出来ないよ」

「ふふつ、全くだ。無くしてたのなら、私の竹刀が黙ってないからな」

「おお怖い…」

二人はふざけながらも、久しぶりの再会を喜んでいた。

キンコーンカーンコーン

「あ、もう時間か」

「そうだな」

授業開始のチャイムが鳴り響き二人は屋上の扉まで行くと、扉の前で竜馬は止まり、笑顔で箒に利き腕の拳を突き出した。

「これからよろしく、箒」

「あぁっ！」

箒も笑顔になり、竜馬の拳を自分の拳に突き出した。
これが、竜馬の親友の証である。

2時間目 教室

箒 Side

私は小学生の頃、道場に通うクラスの男子がいた。そいつの名前は
龍東 竜馬。

同年代と試合して負けなしの私が唯一、勝てなかった奴だ。

最初は、「次は勝つ！」と、私が目標にする気持ちぐらいしか思わ
なかった。

でもある日、私が男子達に【男女】と言われて虐められた時に、竜
馬が男子達に向かって言うてくれた。

「なに男が女の子を虐めてるんだよ！そんな最低な事して、恥ずか
しくないのかよ！」

それからだ。私が竜馬を目標としての気持ち以外に、あいつを意識

し始めた。

竜馬は強いだけじゃなく、老若男女誰にでも優しく、あいつの笑顔はみんなを優しい気持ちにしてくれること。

そして……誰よりも……かつこいいのだと……。

ただその日、道場で竜馬と稽古をしていた時に雪子叔母さんが息を乱して入ってくると、涙を浮かべて竜馬に言っていた。

「竜馬くんの……ご両親が、交通事故で……っ!」

私は目を見開いた。嘘だ!あの優しい竜子さんと人柄の良い竜治さんが亡くなっただなんて。

その話を聞き終わる頃、竜馬は意識を失ってしまった。

数日後、竜馬のご両親の葬式が終わった頃に白黒さんが尋ねてきた。

白黒さんの息子、影宮さんは姉さんの研究者仲間でたまに顔を合わせた程度だ。

尋ねてきた理由は、竜馬を引き取りに来て、今の学校を転校してしまうと言っていた。

それを聞いた夜、私は布団のなかで泣いた。

竜馬が引越す日、私はある決心をしていた。あいつに告白すると、決心していた。

だが、いざ言おうとした時…

「い、いつまでも、私たちは友達だ!!」

私は臆病だ……あれだけ決心したのに、竜馬を前にしただけで心臓が壊れそうだった。

「……。ありがとう」

だが、それを聞いた竜馬は目に涙を溜めながら、私の好きな笑顔をしてくれ、親友の証をしてくれた。

それを終わると、私は髪を結んでいたリボンを竜馬に渡し、そして別れた。

あれから8年、私は竜馬を忘れる事はなかった。

だが2年前、ISを使える男が現れたとニュースを見て驚いた。

竜馬だった。成長はしているが、あの笑顔を私は忘れなかった。

IS学園に入学し、姉さんの友達の千冬さんが担任で驚いたがさらに竜馬が転校してきて、更に驚いた。

休み時間にいろいろ話をしようとしたが、短すぎてあまり話せなかった。でも、親友の証をして私は思った。

私は今でも……竜馬が好きだ!

休み時間 教室

「へえー、りゅーくんってあのメルダに居候してたんだ」

「メルダって、あのメルダ・ファウンデーションでしょ？」

「やっぱりISを使える男子ってスゴイなあー」

2時間目が終了すると、竜馬はクラスの女子に質問攻めにされていた。上から、布仏 本音、相川 清香、谷本 癒子が喋っており、本音の言う《りゅーくん》とは竜馬の事である。

「そうだなあ、あとは「ちょっと、よろしくて？」……ん？」

会話中、後ろから声をかけられた竜馬は振り向いた。話しかけてきた相手は、わずかにロールがかかった金髪のロングヘアの女子だった。

「まあ！なんですよ、そのお返事。わたくしに話しかけられるだけでも光栄なので、それ相応の態度というものがあるんじゃないかしら？」

「えっと……（何なんだこの人。いきなり突っ掛かってきて……ん？この人は……）」

突っ掛かってくるてきた女子に竜馬は戸惑うが、ベントツ車内で読んでいた1組の生徒リストで同じ顔だったのを思い出した。

「たしか……、セシリア・オルコットさんだよね？イギリス代表候補生で、入学試験で教官を倒した……」

「あら、ご存知でしたのね？」

「まあ、クラスメートの名前くらいは覚えないと失礼だしね。まさか代表候補生と同じクラスになるとは、僕も最初は驚いたよ」

竜馬は右頬を掻きながら言うと、セシリアは人差し指をびしっと竜馬に向けた。

「そう！本来ならわたくしのような選ばれた人間とは、クラスを同じくすることだけでも奇跡……幸運なのよ。それは分かってますわよね？」

「まあ筈にも久しぶりに会えたし、たしかにラッキーかも……」

そう言うと、セシリアの目がややつり上がり竜馬に迫っていった。

「わたくしよりも友人と会えた方が幸運って、どういう意味かしら！？」

「え、えつと……まあ落ち着いて」

「こ、これが落ち着いていられ」

キンコンカンコン

セシリアの話に3時間目開始のチャイムが割って入った。

「っ……！またあとで来ますわ！逃げないことね！よくって！」

セシリアは一方的に言うと、竜馬に背を向けて自分の席に戻った。

一方、箒は……

（りり、竜馬が、わわわ私と会えて……らららら、ラッキーって〜）

……俯いて悶えていた。

3時間目 教室

「それではこの時間は実践で使用する各種装備の特性について説明する」

3時間目、教壇には千冬が立っていた。尚、1・2時間目の授業を教えていたのは副担任の山田 真耶である。

「ああ、その前に再来週行われるクラス対抗戦に出る代表者を決め

ないといけないな」

思い出したように千冬が言う、クラスがざわざわと色めき立っていた。しかし、竜馬は冷静にしていた。

（代表者が……。対抗戦とか出れるから、データを取るには良い役所かな）

そう考えていると、女子の一人が手を挙げて言った。

「はい。龍東くんを推薦します！」

「私もそれが良いと思いますー」

「では候補者は龍東 竜馬……他にはいないか？自薦他薦は問わないぞ」

話が進むと、筭は竜馬に言った。

「いいのか？竜馬」

「何が？」

「これではお前が代表者になるが……」

「んー……まあ良いけどね。男が乗るISなんて、いろいろと経験を積みそうだし。なにより……」

「なにより？」

「面白そうだ」

ニカツ！と笑みをした竜馬を見て、箒は微笑んで「まったく…変わってないな」と言った瞬間、教室の後ろにバンツ！と音がした。

「待ってください！納得がいきませんわ！」

音の正体は、机を叩いて立ち上がったセシリアだった。

「そのような選出は認められません！大体、男がクラス代表だなんていい恥さらしですわ！わたくしに……このセシリア・オルコットにそのような屈辱を１年間味わえとおっしゃるのですか！？」

セシリアは怒涛の剣幕で言葉を荒げると、癪にさわったのか箒が言った。

「うるさいぞ。少しは落ち着いたらどうだ」

「貴女はお黙りなさい！ＩＳランクＣの貴女に、Ａのわたくし意見だなんて図々しいですわ！」

「なっ…！何だと」

セシリアの言葉に、箒は怒りの表情で立ち上がった瞬間、それは起こった。

「いい加減にしないか！！」

「っ！」

大声に驚いた箒とセシリアは、声がした方に目を向けた。そこには、

セシリアを少し睨むように見ている竜馬だった。

「黙って聞いていれば……。僕を馬鹿にしたり、侮辱するなら良いよ。だけど、親友を侮辱だけはするな！」

「竜馬……」

筭は竜馬を見て驚きと嬉しさを感じていた。まるで、昔に虐められたところを助けてくれたように。

「な、なにかと思えば……。大体、文化としても後進的な国で暮らさなくてはいけないこと自体、わたくしにとつては耐え難い苦痛で
「イギリスだって大してお国自慢がないくせに。あるのは世界一まずい料理の連続覇者ぐらいだろ」 なっ……………！？」

竜馬が言った一言で、怒髪天をつくと言わんばかりのセシリアが顔を真っ赤にして怒りを示していた。

「あっ、あっ、あなたねえ！わたくしの祖国を侮辱しますの！？」

「先に侮辱したのは君だろ！？」

睨み合いのなか、セシリアはバンツ！と机を叩いて人差し指を竜馬に指した。

「決闘ですわ！」

「ああ、いいよ」

「言っておきますけど、わざと負けたりしたらわたくしの小間使い……………いえ、奴隷にしますわよ」

「真剣勝負に男も女も関係ないよ。手を抜くほど腐ってないよ」

「そう？何にせよちょうどいいですね。イギリス代表候補生のこのわたくし、セシリア・オルコットの实力を示すまたとない機会ですわね！」

セシリアが言い終わると、竜馬はある事を言った。

「んじゃ、ハンデはどのくらいつけたらいいかな？」

「……………はい？」

竜馬が言った一言にセシリアはア然としたが、その瞬間にクラスからドツと爆笑が巻き起こった。

「り、竜馬くん、それ本気で言ってるの？」

「女尊男卑の今、男が女より強かったのって大昔の話だよ？」

クラスの女子は話しかけるが竜馬は動じなかった。

「ふふつ、日本の男子はジョークセンスがありますのね。むしろ、専用機を持つわたくしがハンデを付けなくていいのか迷うくらいですわ」

そう言つと、セシリアは左耳に付けてあるイヤークラスを竜馬に見せた。どうやら、あれがセシリアのISのようだ。

「ハッハッハッハッ！」

だが、竜馬は気にせず笑っていた。

「……やっぱり、ハンデ付けた方がいいかな？」

「はあ！？だからそれは、専用機を持つわたくしが……え？」

「だから、専用機を持つてたらハンデを付けていいんでしょ？」

竜馬の言葉に、セシリアや箒を含むクラス全員が静まり返った。それをよそに、竜馬は首に掛けてあるリボンを外し、メダルをセシリアに見せた。

「ま、まさかそれは……」

「ああ。僕の専用機だよ」

「ええええええ！！！」

クラス全員が驚き叫ぶと、コンコンと何か音が聞こえていた。

「あれ？何でしょうか……」

真耶は音のする方に目をやると固まった。窓を見ると、黒い小さな鳥型ロボットが32インチ薄型テレビを持って窓を突いていた。

『何やら面白そうな事が始まるみたいだな』

画面に映し出されたのは、影宮だった。

「影宮さん。どこでそれを……」

『細かい事は気にするな！それより、専用機と闘えるなんていいじゃないか。頑張れよ！』

「はい、頑張ります！」

影宮は親指を立てて健闘を祈ると、竜馬も親指を立てた。そして、鳥ロボットはテレビを持ちながら空に飛んでいった。

「さて、話はまとまったな。それでは勝負は一週間後の月曜。放課後、第3アリーナで行う。龍東とオルコットはそれぞれ用意をしておくように」

ぱんつと手を打った千冬は話を締めて、授業を再開した。

02話「同棲と代表決定戦と誕生のオーバーズ」(前書き)

2話ができました。

やっとISがたよ……。戦闘シーンが難しいです……。

02話「同棲と代表決定戦と誕生のオーバーズ」

放課後 学園内

授業が終わり、竜馬は一人で学園内を探索していた。

「それにしても、ものすごい視線だな……」

中庭を歩いているだけで、竜馬は女子の目線を集めていた。元々IS学園は女しかいなかったので無理もない。

「今日で全部回るのは無理だな……。ん？」

竜馬は立ち止まると、黒い自販機を見つけて近づいていった。

（ここにもベンダーがあるんだ。形状から見ると販売専用型か……。よし！）

そう思うと、竜馬は意識を手に集中するとメダルが5枚現れた。首に掛けてあるメダルと同じ形だが、裏の模様は5枚全て違っていた。共通するなら、全て生き物が描かれていた。

これがIS専用メダル…セルメダルである。

「……………」

竜馬はISのメダルを自販機にかざすと、硬貨投入口とは別の投入口が中央に現れた。同時に飲み物が全て、赤、緑、水色、黄と、色とりどりの缶に変わった。

「この場合は、タカにするかな……」

言いながら全てのセルメダルを投入し、赤い缶を5本買った。

「そんじゃまあ……」

竜馬は、プシュツ！と缶を1本開けた。すると……

【TAKA KAN】

『キューー！』

『『『『キューー！』』』』

赤い缶は鳥型ロボットに変型し、残りの缶も同時に変型した。

これが、メルダ・ファウンダー^{ベンダー}シヨンの製作の可変型缶ロボット《カンドロイド》と、カンドロイド販売機である。

「学園の施設・設備の場所を調べてくれ。あと、学園にあと何台ベンダーがあるのかも頼むね」

『キューー！』

そう言われたタカ・カンドロイド達は手分けして飛び立ち、竜馬は見届けたあと再び歩き始めた。

廊下 職員室前

日も暮れる頃、竜馬はタカ・カンドロイド達が集めた施設の場所をメモに記入しながら歩いていると、前から真耶が歩いて来た。

「あつ、龍東くん。何しているんですか？」

「さつき学園の施設等を調べてました。ここは広いから、迷わないように一様……」

竜馬は書きかけのメモを見せると、真耶は頷いた。

「そうですか。実は寮の部屋の事ですが……個室の方が用意出来てなくて、1ヶ月程相部屋になってもらいますね」

そう言った真耶は部屋番号の書かれた紙と鍵を渡した。

「届いた荷物は部屋にありますから、時間を見て部屋に行ってくださいね。それじゃあ私は会議があるので、これで」

「はい。さようなら、山田先生。また明日」

竜馬は頭を下げると、寮に向かって歩きだした。

寮

「1025室……ここか」

竜馬は紙に書かれた番号と見比べると、数回ノックした。

「……いないのかな？」

返事が無かったのでドアに鍵を差し込むが、ドアは開いていた。

ガチャ

「失礼しまー……おお！」

竜馬は部屋に入ると驚いた。大きめのベッドが二つ並び、そこいらのビジネスホテルよりも遥かにいい部屋だった。

「荷物は…これだな」

竜馬は机の下に置いてあった荷物を開け、中にあるものをチェック

した。

「えっと…………着替えに携帯充電器、iPad、セルメダルケース…………ん？」

すると、箱の底にはオレンジ色の缶と黒の缶があった。

「新型カンドロイドか……。後で開けてみる「誰かいるのか？」…………っ！！」

竜馬は突然、奥の方から声が聞こえて驚いていると扉が開いた。

「ああ、同室になった者か。これから1年、よろしく頼むぞ」

出てきたのは、体をバスタオル1枚を巻いてタオルで長い髪を拭いていた、今日再会を果たした親友だった。

「こんな格好ですまないな。シャワーを使っていた。私は篠ノ「ほつ、篤！？」之…………えっ？」

自己紹介をしようとした篤は、聞き覚えのある声を聞いてきよんとした。

「り、りょう…………ま…………？」

「あつ、ああ……………」

2人は顔を真つ赤になった次の瞬間……

「い、いやああああああ！！！！！！」

ドゴオオン！

「あべしっ！」

真っ赤な顔をした箒の強烈なアッパーカットが、竜馬の顎にクリーンヒットし、そして……

バタリ

「りっ、竜馬！？しっかりしろ、竜馬！」

そのまま竜馬は気絶をしてしまい、箒は慌ててしまった。

〵十数分後〵

「ごめん！本っ当にごめん！」

「いや、私の方こそすまない。もう頭をあげてくれ」

目を覚ました竜馬は理由を箒に話し、ひたすら謝罪をしていた。尚、箒は竜馬の気絶中に寝間着浴衣に着替えていた。

「と、とりあえず、同室になるのだから色々決めておかなければ
ならないな……」

「そ、そうだね……」

二人は顔を合わせるが、頬が赤かった。あの場面を思い出すので無理もない。

「ま、まずシャワー室の使用時間だが……」

「ああ、箒が先でいいよ。剣道部に入ってるし、終わったあとさっぱりしたいしね」

「そ、そうか……」

「……………」

「な、何見ている……」

「ん？ やっぱり箒って、浴衣とか似合ってるなーと思ってね」

「にあっ……………！」

不意に言った竜馬の言葉に、箒は顔を真っ赤にして立ち上がった。

「箒？ どうし……………」
「あ、ああそうだ！ そのジュースを貰うぞ！」
……………え？」

竜馬の言葉を遮った箒は、竜馬の机に置いてあったオレンジ色の缶を手に取った。

「ああ、それは！」

「ん…？」

止めようとした竜馬だが、箒は缶のプルタブを開けてしまった。すると……

【KUJAKU KAN】

『クジャクー』

「きゃっ！」

突然の出来事に、箒は後ろに下がった。目の前にいるのは、後ろでカッターを回転させて飛んでいるカンドロイド……クジャク・カンドロイドである。

「箒、大丈夫か？」

「あ、ああ……何なんだコレは？」

「ソレは影宮さんの発明品だよ。使用者のサポートをする為に開発したみたい」

【GORIRA KAN】

『ウホッ！ウホッ！ウホッ！』

そう言いながら、竜馬は黒い缶……ゴリラ・カンドロイドを起動させた。

「そうか。……なあ、竜馬。来週の試合だが……」
「箒、頼みがあるんだ」……な、なんだ？」

話の途中、竜馬は真剣な顔で箒を顔を見ながら告げた。

「付き合ってほしい」

「え？」

この時、箒は世界が止まる音を聞いた。

（翌日）

放課後 道場

「ごめん、遅くなった……よ？」

「……………」

授業を終えた2人は、胴着姿で道場にいた。尚、竜馬の胴着は影宮に届けて貰った。

「どうしたの、箒？」

「……何でもない」

「？」

箒は頬を膨らませて不機嫌だが、竜馬は首を傾げるしかなかった。

（何が「付き合ってほしい」だ！特訓の相手ではないか！私はてつきり、その……………」

箒は不機嫌の理由を心の声で叫んでいたが、後になるにつれて心の声は小さくなっていった。

「き……………箒！」

「はっ！」

箒は我に返ると、竜馬は心配そうに見ていた。

「体調が悪いの？やっぱり、止めた方が……」

「だだだ、大丈夫だ！！ほら、さっさと防具を着ける！」

「あ、ああ……」

箒の態度を気にしたが、竜馬は自分の黒い防具を着けた。
箒も赤い防具を着け、2人は向き合った。

「箒と打ち合うのは、本当に久しぶりだな」

竜馬は親友と一緒に、剣道をした頃を懐かしく思い目を閉じ……。

「そうだな。私はもう、昔の私とは違うぞ」

箒は片思いの人と、また打ち合う事が出来て小さく微笑んだ。

「それじゃ……」

竜馬は目を開いたが、いつもと違い、真剣な眼差しをしていた。そして……

「お願いするよ、全国大会優勝者さん！」

「よし、こい！」

特訓が開始された。

1年1組

「……………」

同時刻、セシリアは教室の窓から空を見上げていた。

（あの男も専用機を持っているなんて……）

男……竜馬の発言した専用機の所持を聞いて、セシリアは考えていた。

「……………！（フルフル）」

だがセシリアはその考えを消して、自分の勝利した事を考えた。

（まあ……例え専用機でも、わたくしの勝利は見えてますわ。このわたくし、セシリア・オルコットと《ブルー・ティアーズ》が……）

そう思いながら、セシリアは左耳のイヤークラスを優しく撫でた。

「ねえねえ、道場で篠ノ之さんと竜馬君が剣道で打ち合ってるみたいよー!」

すると、廊下から話し声が聞こえてきた。

「ホント！篠ノ之さんって、去年の剣道全国大会で優勝したんですよ。竜馬君、勝ち目ないんじゃないの？」

「そりゃそうだけど、面白そうじゃない。はやく行きましょー!」

話していた女子達は道場へと向かった。

（篠ノ之さんがねえ……。面白そうですね。あの男がボロボロで泣いているのが目に浮かびますわ）

その話を聞いたセシリアは意地悪な笑みをして、教室を出ていった。竜馬と箒が特訓している道場へと……。

道場

セシリアは道場に来ると中を見た。すると、剣道は終盤に差し掛かっていた。

「はああああっ！」

箒は竹刀を上段に構えて走り込み、竜馬に迫る。だが竜馬は一步も動かずにいた。そして…

バシィィン！

竹刀の音が、勢いよく響いた。

「なっ…！」

セシリアは一瞬の出来事に驚いた。

箒が竜馬の面を打ち出そうとした瞬間、竜馬が急に箒の懷に飛び込み胸を打ち込んだ。

「……おおー！」「……」

ギャラリーは2人に拍手を送ると、2人は面を外した。互いの顔にはうつすらと汗をかいていた。

「ふう……。これで8勝2敗。腕を上げたね、箒」

「むう……。これでは竜馬の特訓と言うより、私の特訓ではないか」

「そうかな？ 僕も最初取られた時は焦ったけど……」

「だが、そこから5連勝したではないか……」

そう言うと、箒はシュンツと小さく落ち込んだ。

「まあまあ、落ち込まないの………ん？」

ふと、竜馬はギャラリーの中にいたセシリアを見つけると、声を掛けた。

「オルコットさん。来週、良い試合をしよう」

「……………ふんっ」

竜馬は微笑みながら言ったが、セシリアはそっぽを向いて道場を後にした。

「…まだ怒ってるのか」「竜馬、何を見ている!」「え?」

箒は不機嫌そうな顔をして竜馬を呼んだ。

「どうしたの箒?」

「休憩は終わりだ。続きをするぞ」

「分かった。そうしようか」

そして、試合が再会された。

その約1時間後、訓練は終了した。ちなみに、竜馬の結果は総合で24勝6敗だった。

夕方 食堂

「…いただきます」

訓練後、竜馬と箒は一度部屋に戻って用事を済ませ、食堂へ行つて夕食を取っていた。ちなみに、箒は焼き魚定食を取っており、竜馬は……

「まさかIS学園でコレが食べれるなんて……」

竜馬の前にあるのは、うどんの上にライス、さらにカレーが掛けられておりトンカツがトッピングされていた。コレが、巷で人気急上昇の定食……カツカレーうどん定食である。

「美味しいなあ。特に衣の湿った感が凄く好みだ……」

「よく食べれるな、その量を……」

「いっぱい動いたからね。よく食べれるよ」

竜馬は笑みを浮かべたが、箸を置いて箸を見た。

「箸、また時間があったら剣道に付き合ってくれるかい？」

「ああ、いいぞ」

「ありがとう。頼りにしてるよ」

竜馬は微笑みながら箸に話した。

「ああ……。 (竜馬が頼ってくれている竜馬が頼ってくれている竜馬が頼ってくれている……) 」

平然と答えたが、頭の中では幸福に満ちていた。

「翌週 月曜」

放課後 第3アリーナ・Aピット

代表決定戦当日、竜馬はISスーツを着てAピットで待機していた。

「もうすぐか…」

「龍東、準備はいいか？」

竜馬は後ろを振り返ると、そこには千冬、真耶、箒がいた。

「織斑先生、どうして此処に？」

竜馬は質問すると、真耶が答えた。

「龍東さんのISのデータがまだありませんので、実物を見せてもらいますね」

「そうなんですか。箒は何で来たの？」

「わ、私は竜馬に激励をだな……」

箒は顔を赤くしながら言った。

「そっか。ありがとう」

「龍東、ISを展開しろ」

「はい。（……行くよ、オーバース）」

千冬の言葉に、竜馬は目を閉じて心の中で相棒を呼んだ。すると、メダルが輝いて竜馬を包み込んだ。

光が消えるとそこには、両肩と背中に浮かんでいる甲冑のようなスラスターと、ベルトの正面と上に何かを入れる溝がある黒いISを装着した竜馬がいた。

「コレが龍東くんの…『《オーバース》』…え？」

ふと、真耶は後ろを振り向いた。そこにいたのは、白衣を羽織った男だった。

「……影宮」

「あの時ぶりだな千冬さん。いや、ここでは先生かな？」

「どうして此処にきた」

「俺が開発したISのお披露目だしさ、映像よりも生で見たいんだよねー。はいコレ」

そう言いながら、影宮は真耶にオーバースの資料を渡した。

「竜馬、頑張って勝てよ」

「はい！」

影宮の言葉に答え、竜馬はピット・ゲートに進もうとすると、箒に話し掛けた。

「箒」

「な、なんだ？」

「行ってくる」

「あ……ああ。勝ってこい」

竜馬はその言葉に笑顔で応え、ゲートを出た。

アリーナ・ステージ

「あら、逃げずに来ましたのね」

ステージには、セシリアが腰に手を当てて待っていた。
彼女は専用機……ブルー・ティアーズに身を包み、手には2mを超える長大なレーザーライフル《スターライトmk?》が握られていた。

試合は既に始まっているので、いつ撃つてきてもおかしくない状態だった。

「最後のチャンスをあげますわ」

すると、セシリアは腰に当てた手を竜馬の方に、びつと人差し指を突き出した状態で向けた。

「チャンス？」

「わたくしが一方的な勝利を得るのは自明の理。ですから、ボロボロの惨めな姿を晒したくなければ、今ここで謝るというのなら、許してあげないこともなくつてよ」

そう言ったセシリアは目を笑みに細めた。すると、オーバーズの情報から、セシリアが射撃モードに移行し、セーフティのロック解除を確認した。

「……親友と約束したんだ。この勝負、負けるわけにはいかないよ」

竜馬が言い終わると、右手に展開されたエネルギー刀ラスライトを構えた。

「そう？残念ですね。それなら……お別れですわね！」

キュインッ！

言い終わる直後、セシリアはスターライトmk?を竜馬を撃ち抜こうとした。

「よつと」

だが竜馬は弾丸を回避すると、スラスタの出力を上げてセシリアに近づいた。

「甘いすわ!」

そう言うと、ブルー・ティアーズのフィン・アーマーから自立起動兵器《ブルー・ティアーズ（別名ビット）》を展開した。

「ちっ!」

竜馬は近づくのを止め、ビットの回避に集中した。

「さあ、踊りなさい。わたくし、セシリア・オルコットとブルー・ティアーズの奏でる円舞曲^{ワルツ}で!」

そして、ライフルとビットによる射撃の嵐が、竜馬に襲い掛かる。

「だつたら...!」

竜馬はラズライトでビームを弾きながら、左手にマシンガン《カービンM5S》を展開。そして、1つのビットに弾丸を放った。

「本体よりも先に叩く!」

だがビットはカービンM5Sを回避し、撃ち落とせなかった。

「そこだ!」

「なっ！」

だが、竜馬はビットの回避予測軌道にラズライトを投擲し1つ破壊すると、セシリアは驚いた。

「なかなかやりますわね！」

「そりゃどうも……っ！」

セシリアは更に残りのビットを全て展開すると、竜馬は回避に専念した。

アリーナ・Aビット

「はああ……。すごいですねえ、龍東くん」

Aビットでは、リアルタイムモニターを見ていた真耶がため息混じりにつぶやいていた。

「武装の展開が速いな。だいたい500時間の稼働で身についたみたいだな」

「正確には、503時間19分だけだな」

千冬の言葉に答えた影宮は、どこか楽しんでた。

「……………」

筈はモニターにうつる竜馬を見つめていた。

（私はまだ、お前と並ぶことが出来ないのか…………竜馬……）

アリーナ・ステージ

「2機目貰い！」

一方、竜馬は2機目のビットの破壊に成功していた。

「そんな……！」

セシリアは驚いてるなか竜馬はラズライトを構え、セシリアの懷に飛び込もうとしてスピードを上げた。

「これで、終わりだ……かかりましたわ！」……何？」

セシリアはニヤリと笑うと、腰部から広がるスカート状のアーマー

が展開した。

「おあいにく様、ブルー・ティアーズは6機あってよ！」

しかも、先程のレーザー射撃を行うビットではなく、ミサイル弾道型を放った。

「くそっ！」

竜馬は咄嗟に両手の武器をミサイルに投げて直撃を免れたが、爆風により引きはがされた。

「初見でこうまで耐えたのは、貴方が初めてですわね」

煙が晴れると、セシリアはビットを自分の周りに浮かべさせていた。

「ですが、貴方は武器も無く丸腰同然。わたくしに勝つ事は不可能ですわ」

「……………フッ」

セシリアの言葉に、竜馬は笑っていた。その瞳は、まだ勝負を諦めていなかった。

「何が可笑しいのですの？」

「いや、凄いなと思ってね。それに、本気を出さないと失礼だと思っ
つて…ね」

すると、竜馬の左手に1枚のセルメダルを出していた。

「だから、ちよつと本気をだすよ！」

そしてセルメダルをベルトの上にある投入口に入れ、右手をベルトの前にスライドさせた。すると……

カポーン！

ベルトから音が鳴り響き、白と緑が混ざった光の球体に身を包まれた。そして光が収まると、そこにいた。

黒いヘッドギアはU字型カメラアイとカプセル状のヘルメットが合体したバイザーに変化。

両手、両足、背中、胸と、合計10個のオーブが付いた装甲。そう、オーバースは姿を変えていた。

アリーナ・Aピット

Aピットでは、影宮以外が竜馬の変化に驚いていた。

「う、これは！」

真耶はディスプレイを見て驚いた。そこにはオーバースの情報が載

つてあると同時に、“《バース・モード》起動”と載っていた。

アリーナ・ステージ

「な、ISの姿が変わった!？」

セシリアは目の前の事実に驚愕していた。ISの姿が変わるのは1
ファースト・シフト
次移行しか知らなかった。だが、竜馬のオーバーズはそれを済んでいる。

「さて…。行こうか、バース!！」

竜馬は相棒…オーバーズ・バースモード（別名バース）の右手に展
バースバスター
開した携行型火器を撃ちながらセシリアに突っ込んだ。

「くっ、ブルー・ティアーズ!」

セシリアはミサイルを発射するが、バースバスターによって全て撃ち落とされた。そこにすかさず、ビットを2機多角的な直線起動で竜馬に接近させた。

「この距離なら、コレがいいかな!」

竜馬はバースバスターを収納すると、またメダルをベルトに挿入した。すると……

【CRANE ARM】

音声と共に、右腕にはクレーン状の武器が展開された。クレーンアーム

「あらよつと！」

竜馬はクレーンアームを降ると、先端のワイヤークレーンが発射され、2機のビットのスラスターを破壊した。

「なんですってー!!」

セシリアが驚くなか、竜馬はクレーンアームをセシリアに向けて放った。

「イ、インターセプター！」

だがそこは代表候補生。クレーンが当たる直前、ショートブレード《インターセプター》で受け流した。

「きゃっ！」

だが竜馬のパワーが高く、セシリアはインターセプターを落としてしまった。

「よしっ！」

竜馬は攻撃を当てたことに、ガッツポーズを取った。

「迂闊でしたわ……。わたくし、貴方を侮っていましたわ」

「そりゃどうも」

すると、竜馬はクレーンアームを収納してバースバスターを展開させた。

「僕には、もう失いたくないものがある。守りたい友がいる。いまはまだ自分の手が届く程しか守れないけど、それでも…命に変えて守ってみせる！」

そう言いながら、竜馬はバースバスターのバレルポッドを銃口に接続した

「……そうですか」

セシリアは目を閉じた。自分よりも大きな負けられない理由を聞き、彼の勝負に賭けた覚悟を聞き、セシリアは思った。強くなりたい……。竜馬のように。

「……なれますか？」

「ん？」

「わたくしも、貴方のように強くなれますか？」

すると、竜馬は笑顔で答えた。

「ああ、強くなれるさ。だけど、今はこの勝負が終わってからだね！」

「!?!?……そうでしたね。なら、わたくしの全力を、貴方にぶつけます！」

そう言ったセシリアはシールドエネルギーを僅かに残し、全てをスターライトmk?に注いだ。

「そうか。だったら僕も、応えないとね！」

【CELL BURST】

竜馬はバースバスターのトリガーを引くと、強力なエネルギー弾が発射された。

「コレが、わたくしの全力ですわ！」

同じく、セシリアも最大出力のレーザーを発射した。

ドカアアアアン！

2つの弾丸は巨大な爆発をして2人を巻き込んだ。

ビイイイイイ!

そして終了のブザーが鳴り響くと、煙は晴れて2人は浮かんでいた。
そして……

『勝者、龍東 竜馬!』

勝負が決まった。

アリーナ・Aピット

「ふう。なんとか勝てた……」

竜馬がピットに着くと、影宮は竜馬に近づいた。

「よっしゃ!よくやったぞ竜馬!」

「影宮さん。どうでしたか?」

「初陣としては上々かな。バースC L A W sの単一仕様能力も出来てみたいだし。まあ強いて言うなら、他のC L A W sも披露してほしいかなー」

「ははは…、頑張ってみます」

竜馬は苦笑いを見ると、オーバースを待機状態のメダルにした。ちなみに、バースのワンオフ・アビリティは『エネルギー・ドレイン・アタック』（略してE・D・A）と言い、C L A W sの攻撃に当たったISや武器のエネルギーを、バースのシールドエネルギーに変換する能力である。

「竜馬…」

「あ、箒！」

竜馬は箒に気付くと、ゆっくり近づいた。

「箒、勝ったよ」

「ああ、よく頑張ったな」

2人は拳と拳を突き出すと、笑いあった。

「いいお友達ですね」

「……そうですね」

真耶の返事に千冬は応えたが、別の事を考えていた。

（2次移行無しで姿を変えるISなんて聞いた事が無い。それに、
セカンド・シフト
バース・モードになる前の姿。あれではまるで……）

千冬はオーバーズが初めて展開された姿を、あるISと重ねていた。細部は若干違うが、それは自分が初めて纏ったISに酷似していた。

（まさかあれは…）

「織斑先生……、どうかしましたか？」

「ん？いや、何でもないですよ山田先生。私は先に戻りますので、これで…」

そう言うと、千冬はピットから出ていった。

～夜～

寮 セシリアの部屋

その夜、あのクラス代表決定戦が終わったセシリアは、シャワーを

浴びながら物思いに耽っていた。

（負けて……しまいましたね……）

負けてしまった……。だが不思議と後悔はしなかった。

（……………）

セシリアは竜馬のことを思い出す。誰にでも向ける優しい笑顔と、強い意志の宿った瞳を。

他者に媚びることのない眼差し。それは、不意に自分の父親を逆連想させた。

（父は、母の顔色ばかり伺う人だった……）

幼少の頃からそんな父親を見て、セシリアは『将来は情けない男とは結婚しない』と決めていた。
しかし……

（…………… 龍東…………… 竜馬……………）

彼は自分に勝った。セシリアは竜馬の強い瞳に、その言葉に吞まれていった。

『命に変えて守ってみせる！』

『ああ、強くなれるさ』

父とは正反対のように強く勇ましい瞳が、あの優しい笑顔を忘れられなかった。

「龍東、竜馬……」

セシリアは竜馬の名前を口にしてみると、胸が熱くなるのを感じていた。

どうしようもなくドキドキとして、そつと自分の唇を撫でてみると、形のいい唇は触れられることを望んでいたかのように不思議な興奮を生み出した。

（わたくしは知りたい……もつと貴方のことを……竜馬さん………）

浴室には、ただただ水の流れる音だけが響いていた。

（翌日）

休み時間 教室

S H Rでクラス代表が発表され、休み時間にはクラスメートが竜馬の前に来て話をしていた。

「これでクラス対抗戦が面白くなるね」

「そうだよー。せっかく世界で唯一の男子がいるんだから、同じクラスになった以上、持ち上げないとねー」

「私たちは貴重な経験を積める。他のクラスの子に情報が売れる。1粒で2度おいしいね、龍東くんは」

クラスメートの話しに、竜馬は苦笑いをするしかなかった。

「あの、竜馬さん……」

すると、竜馬の下にセシリアがやってきた。

「やあ。先日はお疲れ様、オルコットさん」

（…竜馬…さん？）

筈はセシリアの言葉に違和感を感じた。

「は、はい。……そのことなのですが……申し訳ありませんでした！」

セシリアは急に、深々と頭を下げた。

「わたくしが少々、冷静さが欠けていたために、あのような失礼なことを……」

「ああ、気にしてないよ。あの時、僕も酷いこと言っちゃったし…

…こっちこそゴメン」

「……………お優しいですね」

竜馬の謝罪に、セシリアは頬を赤くして小さく言った。

「ん？」

「な、なんでもありませんわ。それで、宜しければもう1度、自己紹介をさせていただきませんか」

「ああ、構わないよ。改めまして、龍東 竜馬だ。よろしく」

「わたくし、イギリス代表候補生のセシリア・オルコットです。セシリアと呼んでください」

2人は握手をすると、竜馬は利き腕の拳握った。

「ん」

「え？」

竜馬はセシリアにも同じように拳を作らせると、竜馬はセシリアの拳を自分の拳に突き当てた。

「これで今日から親友だね。よろしく、セシリア」

親友の証をした竜馬は、セシリアに笑顔を向けた。すると、セシリアは竜馬の利き手を両手でしっかり握った。

「はい！あの……そ、それですわね、本日の放課後……ふ、ふたりっきりで特訓を」

バンッ！

いきなりの音に驚いた竜馬は、音の方に目を向けた。そこには、異様に殺気立った瞳をした箒だった。

「あいにくだが、竜馬の相手は足りている。“私が”、直接頼まれたからな」

“私が”を特別強調した箒はセシリアを睨んだが、セシリアは正面から受け止めて視線を返していた。

「あら篠ノ之さん。貴女が竜馬さんに教えるより、わたくしのように優秀かつエレガント、華麗にしてパーフェクトな人間が特訓に付き添えば、それはもうみるみるうちに成長を遂げますわ」

「なんだとっ！」

「なんですの！」

竜馬は箒とセシリアの様子を見て、ヤレヤレと心で思った。

「ねえ、りゅうくん。止めなくていいの？」

「まあ親友と親友のじゃれあいみたいだし、大丈夫だよ。いやー、仲良しは良いことだねー」

「「私^{わたくし}はこいつ（この人）と仲良しじゃない！（ありませんわ！）」
」

竜馬の言葉に、箒とセシリアは同時に言った。

メルダ・ファウンデーション 地下技術開発室

同時刻、メルダ・ファウンデーションの地下にあるISの技術開発室で、ある開発をしていた。

「影宮局長。全セルメダル1500枚の準備が完了しました」

1人の研究員は影宮に近づき報告した。

「そうか。では、起動だ」

「はい！」

研究員は走り去ると、影宮はアクリルケースに入れられた物を見た。それはセルメダルとは違い、15枚全てに色があるメダルだった。

「起動開始！」

影宮の発言により、研究員はレバーを引いた。

すると、別室で用意された1500枚のセルメダルは光の粒子となり、ホースを辿って15枚のメダルに吸収されて激しく輝いた。

「……………」

光が収まると、影宮はアクリルケースにある赤いメダルを手にとった。

「これでコアメダルの完成だ。あとは竜馬に届ければ……………フハハハッ」

そう言うと、影宮は子供のような笑みを浮かべていた。

オリジナルIS設定（随時更新）（前書き）

タイトル通りです。

話が進むに連れて増えていくと思います。

オリジナルIS設定（随時更新）

機体名：オーバーズ

操縦者：龍東 竜馬

開発者：黒木 影宮

待機状態：メダル

特殊機能：メダルチェンジ

プリセット
基本装備

エネルギード
ラズライト

狙撃ライフル《ドミニオン》
アウエーション
双槍

イコライザ
後付武装

ショットアックス《バーンブレイズ》

雑刀《真機鉄》

マシンガン《カービンM5S》

ショットガン《ライオットS3》

ビームガン《マグナムブラスター》

ビームマシンガン《アサルトAR4C》

ハンドガン《スカウト》

ハンドガン《レッドホーク》

ライフル《シューターSR35S》

レーザーライフル《プリズム》

ビームショットキャノン《メテオ》

ハイパーマシンガン
実弾機関銃

ハイパーガトリング
レーザー機関銃

シヨットキャノン《アース》

4連ランチャー《フォークラスター》

広範囲爆撃ランチャー《メガデス》

高電圧弾ランチャー《ブリッツ》

ガイア
大斧

ソニックアックス
ブースター内蔵型斧

高電圧ハンマー《タケミカツチ》

アカツキ
苦無

エネルギーナイフ《カレツカ・エッジ》

ブレイブ
打突強化鉄甲

各種グレネード

各種カンドロイド

両肩と背中に甲冑のような非固定浮遊部位型の推進機が合計3機、
腰部にメダルチェンジツール《オーバーズ・ドライバー》を装着し
ているのが特徴の万能型IS。

バースロット
拡張領域が第2世代ISの4・6倍だが、高いコストを持つメルダ
インストール
製の武器のみを量子変換しているので、それほど空いてない。

特殊機能は、ドライバー上にあるセルメダル投入口と、ドライバー
正面にある3つのメダルをはめ込む溝にコアメダルを入れることで、
オーバーズの姿と性能が一気に変化させる。

オーバース・バースモード

プリセット

バースバスター
携行型火器

イコライザ

バースCLAWS

グレネード各種

カンドロイド各種

ワンオフ・アビリティー：《エネルギー・ドレイン・アタック（
E・D・A）》

オーバースがドライバーにセルメダルを投入して変化した姿。

背中のスラスターが無くなりスピードは落ちたが、全身に装甲が付
加されて防御力が上昇している。

バースモード状態ではプリセットはバースバスターのみになり、イ
コライザが専用武器《バースCLAWS》に変化され、グレネード
とカンドロイド以外のイコライザが仕様不可能になる。

ワンオフ・アビリティー《E・D・A》は名前通り、一部のバースCLAWSを相手ISが武装に当てる事でエネルギーを自身のシールドエネルギーに変換する。

バースCLAWS

両腕と両足、胸と背中、合計6個で構成されているバースモード専用武装。

威力が高く、一部の武装でワンオフ・アビリティーを発動させる。

・クレインアーム

右腕に装着される武装。ワイヤーフックを伸ばして離れているモノに当てたり、引き寄せたりする。

03話「オカマとパーティーとコアメダル」(前書き)

第3話ができました。

タイトル通り、苗字は変えてますが、あのキャラが出ます。

それと、メダル関連のネタや兵器も出していきますので、分かってくれたらうれしいかも。

それではどうぞ！

03話「オカマとパーティーとコアメダル」

6時間目 第1アリーナ・ステージ

4月の下旬、竜馬達は第1アリーナにて授業を受けていた。

「ではこれよりISの基本的な飛行操縦を実践してもらおう。龍東、オルコット。試しに飛んでみせる」

千冬の言葉に竜馬達はすかさず反応し、ISを展開させた。尚、竜馬との対戦で損傷したセシリアのブルー・ティアーズに装備されているビットは、完全に修復が終わっていた。

「龍東、お前はバースモードに変更しろ。その状態のスピードは見たが、バースの状態はそんなに見てないからな」

「分かりました。では……」

竜馬はセルメダルを出すとベルトに投入して、右手をベルトの前にスライドさせた。

カポーン！

光の球体に包まれると、オーバースは姿を変えてバースになった。

「よし、飛べ」

千冬は確認すると、竜馬達に指示をした。2人は急上昇するが、若千竜馬は遅れていた。

『どうした。データ上の出力ではオーバースの方が上だぞ』

千冬は通信回線から竜馬に言った。

「モードが変更して出力が減ってるんですよ。CLAWSを展開すればデータと同じぐらいになりますか……」

『そうか。よし、いいだろう。展開後は最高速度で飛んでみる。いいな』

竜馬は「はい」と答えると、竜馬はセルメダルをベルトに入れた。

【CUTTER WING】

音声と共に、背中には鋭い刃がある翼状の武器が展開され、ブースターを起動させた。カッターウイング

『お速いですわね』

飛行中、セシリアはプライベート・チャンネル個人間秘密通信を開いた。

「まあ、ウイング自体は微調整すれば今よりも速くなるけど、僕の腕じゃあ、まだコレが精一杯かな」

言いながら竜馬は旋回飛行をしていると、セシリアに近づいて話し

掛けた。

「セシリアは放課後、予定あるかな？狙撃の訓練をするから指導してほし……」
「本当ですか！」……う、うん」

竜馬の言葉を遮る様に、セシリアは驚きと嬉しさの顔をして言った。
あの試合以降、何かと理由を付けては竜馬と練習をしており仲が縮まっていた。しかし竜馬に対して態度が柔らかくなった分、箒に対しては硬くなっていた。

「分かりましたわ。それでは放課後、第3アリーナでしましょ」

『竜馬っ！いつまでそんなところにいる！早く降りてこい！』

いきなり通信回線から怒鳴り声が聞こえたので、竜馬は驚いた。すると地上では、真耶がインカムを箒に奪われてオタオタしていた。

『2人共、急降下と完全停止をやって見せろ。目標は地表から10cmだ』

「了解です。では竜馬さん、お先に」

そう言うとセシリアは直ぐさま地上に向かい、完全停止を難無くクリアした。

「流石だね。んじゃ、僕も……」

それを確認した竜馬も急降下するために速度を上げた。

（よし、ここで停止準備）

だが、地表50cmに来たところでトラブルが起こった。

ガンッ！

「痛っ！」

ドスッ！

竜馬は急に後頭部を痛みに襲われた。そのせいで、地上に俯せで墜ちてしまった。

「らしくないぞ、竜馬」

「痛っつ。何だ何だ？」

腕を組み目尻をつり上げている筈をよそに、竜馬は後ろを見た。

『キューー！』

そこに飛んでいたのはタカ・カンドロイドだったが、色は赤ではなく黄色になっていた。

（黄色のタカ！まさか……）

竜馬は黄色いタカ・カンドロイドを見て、ある人物を思い出した。

「竜馬、聞いてるのか！」

箒の言葉に竜馬は我に返ると、箒は続けざまに言った。

「どうしたんだ竜馬。らしくないしっぱ……」大丈夫ですか、竜馬さん？お怪我はなくて？」……ムッ……」

箒の言葉を遮るように竜馬の前にセシリアが立ち、竜馬に手を差し出した。

竜馬はその手を取ると、姿勢制御をして上昇した。

「ああ、あの高さぐらい大丈夫だよ……」

「そう。それは何よりですわ」

セシリアは「うふふ」と楽しそうに微笑むと、それを見た箒は不機嫌そうに言った。

「……ISを装備していて怪我などするわけがないだろう……」

「あら、篠ノ之さん。他人を気遣うのは当然のこと。それがISを装備していても、ですわ。常識でしてよ？」

「お前が言うか。この猫かぶりめ」

「鬼の皮を被っているよりマシですわ」

バチバチバチッ

2人の視線が激しくぶつかり、火花を散らす様だった。

クラスの大半の女子はその様子を見て“、男子を取り合うような場面”として見ていたが……。

（うーん。ハイパーセンサーにこんな機能あつたっけ？）

しかし、その男は全く別の事を考えていた。

「あのタカは……もういないか……」

竜馬は辺りを見ると、黄色いタカ・カンドロイドはいなくなっていた。

「おい、馬鹿者共。邪魔だ。端っこでやっている」

すると、千冬は箒とセシリアの頭をぐいっと押しのけて、竜馬の前に立った。

「龍東、その状態で武装を展開しろ」

「はい」

「よし。では始めろ」

そう言われ、竜馬は辺りに人がいない事を確認すると、相手に銃火器を向けるイメージをした。そして一瞬爆発的に光ると、その手にはバースバスターが握られていた。

「いいだろう。次は近接武装を展開しろ。確かC L A W Sにしか無かったな」

「分かりました。では…」

竜馬はバースバスターを収納すると、セルメダル2枚を取り出して、ベルトに投入した。

【CATERPILLAR LEG】

【SHOVEL ARM】

音声と共に、左腕には巨大なショベル状の武器と、両足には無限軌道型移動補助武器が展開された。

展開が完了すると、竜馬はキャタピラレッグで移動しながらショベルアームを豪快に振って、更にキャタピラレッグによる蹴り技を披露した。

「ふむ……。基本武器の展開は悪くないがC L A W Sはその倍か……。時間短縮が出来ないのは厄介だな」

「通常の展開とセルメダルによる展開ではシステムが違い過ぎますので……。すみません」

「まあいい。セシリア、武装を展開しろ」

「はい」

セシリアは左手を肩の高さまで上げ、真横に腕を突き出した。一瞬爆発的に光ると、その手にはスターライトmk?が握られていた。

「流石だな、代表候補生。……ただし、そのポーズはやめろ。横に向かつて銃身を展開させて誰を撃つ気だ。正面に展開できるようにしろ」

「で、ですがコレはわたくしのイメージをまとめるために必要な……直せ。いいな」……っ！……はい」

セシリアは反論の余地は大いにあるような顔をしていたが、千冬の一睨みによって話が終わった。

「次は近接用の武装を展開しろ」

「は、はい……」

(…ん?)

竜馬はセシリアの顔色が変わったことに気づき、試合の時にインターセプターを展開する際、時間が掛かっていたことを思い出した。

(時間が掛かるということは、今まで射撃戦闘しかしてないのかな。こりゃあ、狙撃訓練のお礼に近接訓練をしてあげようかな……)

そう思うと、ヤケクソ気味にインターセプターを叫んだセシリアに気付いた。

「………何秒掛かっている。お前は、実戦でも相手に待ってもらう

のか？」

「じ、実戦では近接の間合いに入らせません！ですから、問題ありませんわ！」

「ほう……。龍東との対戦では懐に入り込まれそうな場面がいくつか見られたが？」

「あ、あれは……。その……」

セシリアの言葉は歯切れの悪くなり、ゴニョゴニョとまごついていった。

竜馬はその様子を見てみると、セシリアにキツ！と睨まれ、プライベート・チャンネルが送られた。

『貴方のせいですわよ！あ、貴方が……。わたくしに飛び込もうとするから……。せ、責任を取っていただきますわ！』

「？」

セシリアの言葉に、竜馬は頭を傾げた。

「……時間だな」

千冬は腕時計を見ると、授業の終了間近だった。

「今日の授業はここまでだ。すぐに着替えて教室に戻るように」

千冬はそう言うと、女子全員は更衣室に行った。尚、竜馬は反対方向の更衣室へ行っていた。

放課後 ゲート前

「おかえり〜タカちゃん」

授業終了の1時間後、ゲート前には背中に三日月のエンブレムが付いている黒いジャケットを着た、ガタイの良い男がいた。その男の手には、黄色のタカ・カンドロイドが置かれていた。

「竜馬ちゃんの授業は終わったみたいねっ んじゃ、会いに行きましょー！」

男はゲートを潜り、クネクネと歩いて行った。

第3アリーナ・ステージ

「……………」

竜馬は現在、地表約100mにあるバルーンを狙撃ライフル《ドミニオン》で狙っていた。

周りには、バルーンの破片がいくつもあり、元の数が多いのが分かる。

バンッ！

すると、ライフル特有の音が鳴り響き、少し遅れて最後のバルーンが割れた。

「ふう……………」

「素晴らしいですわ、竜馬さん」

「いや、ここまで出来たのはセシリアのおかげだよ。ありがとう」

「い、いえ……………それほどでも……………」

竜馬の言葉に、セシリアの顔は赤くなった。

「それじゃあ、次は近接訓練をしようか」

「あの……………、わたくしは余り近接戦闘は……………」

「大丈夫だよ。僕も近接武装を展開するから同じさ」

そう言うと、両手にはエネルギーナイフ《カレッカ・エッジ》が握られていた。

「……分かりましたわ。では、お手柔らかにお願いしますわ」

セシリアもインターセプターを展開させた。

「それじゃ、行く…「龍東くん!」…ん?」

竜馬は声の方に振り向くと、真耶がこちらに近づいていた。

「山田先生。どうしたのですか?」

「あのー……龍東くんにお客様が来ているのですが………」

「お客さん?」

「でも……あまりにも怪しい動きをしていたので、警備員の方たちと一緒に応接室に待たせているんです」

(……………まさか)

竜馬は確信してしまった。1時間前に見た黄色いタカ・カンドロイド、怪しい動きの男、それらのキーワードが完全に一致する人物を知っていた。

「分かりました。今から向かいますね」

「はい。それじゃ、先生は会議があるから」

真耶の姿を見届けると、セシリアが近づいていた。

「どうかしましたか？」

「ああ…。僕にお客さんが来てるって言われたから、ちょっと行ってくるね」

「でしたら、わたくしも一緒に行きますわ」

「あー……。まあ、いいけど……」

「……？」

竜馬の態度に、セシリアは不思議そうに思った。

「んじゃ、ピットに戻ったら通路の自販機で待ち合わせようか」

「ええ、分かりましたわ」

そして、2人はそれぞれのピットに戻った。

通路

「あれ？箒」

着替え終えた竜馬は待ち合わせ場所に着くと、箒と鉢合わせた。箒は部活後なのか、胴着姿だった。

「訓練は終わったのか？」

「終わったというか、なんかお客さんが来たから中断したんだ」

「客？影宮さんか？」

箒がそう言つと、竜馬は憂鬱そうな表情をした。

「いや、違ふと思う。多分、予測が正しかったらお客さんは……」
竜馬さん「……」

竜馬の言葉を遮り、セシリアがやってきた。

「あら、篠ノ之さん。何かわたくし達にご用ですか？」

「……竜馬、どういうことだ？」

箒は竜馬に話し掛けると、不機嫌オーラが垂れ流していた。

「ん？ああ、セシリアも一緒に行くんだって。そういえば、箒は何処に行くんだ？」

「私は職員室に用がある。それだけ……」

言いかけるが、箒は手を口に当てて考えていた。

「……………箒？」

「よし、私も一緒に行こう」

「なっ！」

箒の言葉にセシリアは驚いた。

「箒も？まあ応接室は職員室に近いか……。セシリアも良いよね？」

「え、ええ……………いいですわ」

まごついたセシリアだが、心の中では少し余裕だった。

（まさか篠ノ之さんに出会うとは、予想外でしたわ。でも、竜馬さんとの実戦訓練はわたくしとしか一緒にできませんですし、まだまだ余裕ですわ！）

対して、箒は少し焦っていた。

（セシリアも一緒だったとは……。早く訓練機の使用許可を貰わないと、竜馬ともっと一緒にいられなくなる！）

一方、竜馬はある人物の事を考えていた。

（ここって女子しかないからな……。あの人、大人しくしてくれるかなあ……………）

3人はそれぞれ思いながら、応接室に向かった。

応接室

3人は応接室の前に来ると、竜馬はドアをノックした。ドアが開くと、そこには千冬が立っていた。

「来たか。ん？篠ノ之とオルコットも一緒か…」

「織斑先生。どうしてここに？警備員がいるって山田先生が……」

「ああ……。アイツが担任を出せとうるさいから、私が呼ばれたんだ。そのあとで戻って行った」

「竜馬ちゃん！久しぶりねえ」

すると、千冬の背後から声が聞こえた。そこにいたのは、ゲート前にいた男だった。

「ひ、久しぶりです、京水さん」

竜馬は男……京水の名前を呼ぶと、京水はクネクネ動きながらこち

らにきた。その動きを見た3人は若干引いていたが、セシリアは竜馬に話し掛けた。

「あ、あの……竜馬さん。こちらの方は……」

「あ、ああ……。この人はメルダでIS武器開発局の主任で……」

「須藤 京水すどう けいみずよ。よろしく あんた達は……竜馬ちゃんのお友達？」

「は、はい。わたくしはイギリス代表候補生のセシリア・オルコットと申します」

「……ジー……」

すると、京水はセシリアをジーっと見つめた。

「あ、あの……「いい身体してるじゃない……」…えっ!？」

京水の言葉にセシリアは数歩下がったが、京水は同じ歩数で近づいた。

「でも……私の方が……おっぱい大きいわ……」

「あ、あ、貴方……! 初対面で失礼じゃありません 「私の方が、おっぱい大きいわ!」 ひいっ!？」

京水の叫びにより、セシリアは竜馬の背中に隠れた。

「りよ、竜馬……大丈夫なのか、あの変なオッサン 「変なオッ

サン！」　　「うわっ！！」

箒の言葉により、京水は血相を変えて箒に近づいていき言った。

「言ったわねっ！！あんたレディーに対して最大の侮辱をつ！！ム
ツキイイイイイイイ！！」

「し、失礼しました！？」

京水の豹変ぶりに、箒は謝罪をしながら竜馬の背中に隠れた。

「あーヨシヨシ。……京水さん。僕に何か用事ですか？」

竜馬は箒とセシリアの頭を撫でながら、京水が学園を訪問した理由を聞いた。

「あらいけない、私ったら熱くなっちゃったわ……。はいコレ」

すると京水はリュックの中から黒いホルダーと資料を取り出すと、
竜馬に渡した。

「コレって……まさか！」

竜馬はホルダーの中を確認した。そこにはカラフルなメダルが15
枚と、セルメダルが9枚はめ込まれていた。

「そう！コアメダルが完成したから持ってきたわ」

「そうだったんだ。でも、完成したら影宮さんが持ってきてそうだけ
どなあ……」

「影宮ちゃんに頼まれたのよ。実際はそうしたかったみたいだけど、急な仕事が入っちゃったからね」

京水はクネクネと動きながら言った。

「あと、明日は土曜日よね。昼頃に影宮ちゃんが来てコアメダルの性能テストするみたいだから、予定空けといてね」

「そうですか。分かりました」

「それじゃあ私は帰るわね。早く帰って新しい武器の最終調整しないといけないから……じゃあね、竜馬ちゃん！」

京水はヌルヌルと動きながら応接室を出た。

「……大丈夫？2人とも」

竜馬は箒とセシリアの心配をした。

「す、凄い剣幕だった……」

「こ、怖かったですわ……」

2人を見て、竜馬は苦笑いをするしかなかった。

夕方 寮 竜馬・箒の部屋

京水と別れた後、竜馬とセシリアは寮に戻ってきて部屋にいた。箒はというと、職員室に用があるので今はいない。

「コレが、コアメダル……」

竜馬はメダルホルダーにある赤いコアメダルを手に取ると、じつくりと見た。

「……………」

「竜馬さん。どうしましたか？」

「ん？ああゴメン。やっとオーバーズのコアメダルが届いたからじつくり見てた」

「……1つ聞いても、いいですか？」

「何？」

「このメダルって、一体何ですか？試合の時や、今日の授業にも使っていましたし」

セシリアはメダルホルダーのメダルを指差した。

「そうだなあ……」

竜馬はそう言うと、セルメダルを手を取った。

「これはセルメダル。バースモードに展開する時に使う他に、CLAWSの展開、バースバスターの弾丸にも使うメダルだよ。あと他に……」

良いながら、竜馬は机に置いてある水色の缶を手を取った。

「コレを買うのにも使うかな」

【TAKO KAN】

『タコー!』

プルタブを開けると、脚を回転しながら飛んでいるカンドロイド……
…タコ・カンドロイドを起動した。

「まあ!かわいらしいですわ」

「よかったらあげようか?あ、でも新しい方がいいか」「ほ、本当ですよ!?!」　　な……ん?」

竜馬はセシリアを見ると、眼をキラキラさせて竜馬を見ていた。

「こ、こちらの物を貰ってもいいんですの!?!」

「え？新しい方がいいとおも 「いえいえいえ、それが良いので
すわ！？」 ……そ、そう？」

「はい！」

「まあ……良いか。はい」

竜馬はタコ・カンドロイドを元に戻してセシリアに渡した。

「ありがとうございます！！一生大事にしますわ！！」

セシリアはタコ・カンドロイドを大事そうに持った。

ガチャ

「……何をしている」

部屋の扉が開く音がすると、少々ご機嫌な箒が制服姿でいた。

「おかえり箒。用事は終わったの？」

「ああ。訓練機の使用許可を貰ったぞ！今度の訓練は、剣道からI
Sに変更だ」

箒は許可書を竜馬に見せていると、セシリアは心の中で焦っていた。
（くっ……！まさか、こんなにあっさりと訓練機の使用許可が下り
るだなんて……。コレでは、竜馬さんとふたりっきりの時間が大幅

に減ってしまいますわ!」

「セシリア、どうかした?」

「い、いえ! なんでもありませんわ!」

「そう? んじゃ、コアメダルについては食堂で話すよ」

そう言つと、竜馬は立ち上がって部屋を出た。

「おい竜馬! 私は帰ってきたばかりだぞ。少し待て……っておい!」

「り、竜馬さん! お待ちになって!」

竜馬を追うように、箒とセシリアも部屋を出た。

食堂

竜馬達は食堂に着くと、それぞれ夕食を持って同じテーブルに座った。ちなみに箒は焼き魚定食、セシリアはパスタ、そして竜馬は和風おろしハンバーグ定食だ。

「…成る程な。つまりコアメダルはオーバースの装甲を完全に化するメダルなのか」

「うん。資料には確か、セルメダル100枚分の力があるコアメダルを3枚使って、オーバースを変化させるんだ。この場合は変身って言っのかな…」

「100枚ですか……。随分高いですね……」

セシリアは食堂に着く前に、セルメダルの値段について質問していた。

セルメダル1枚の価値は、日本円で約1万円と言っていた。その100枚分で作られたコアメダル15枚で1500万円……。1体のISにそれほどの資金を注ぎ込むとは、セシリアはとても驚きを越えて呆れたように言った。

「そういえば、2人は明日どうするの？僕は性能テストをするから特訓が出来ないけど…」

すると、箒は頬を赤くして言った。

「け、見学しても良いか？」

「ん？別に良いけど……」

「そうか！よし……部活の用事が終わったらすぐ行くぞ」

「ああ、分かった…」「でしたら、わたくしも見学しますわ！」「…ん、セシリアも？」

竜馬の言葉を遮るように、セシリアも若干頬を赤らめて言った。

「ああ、いいよ」

「ありがとうございます（篠ノ之さん……。竜馬さんとふたりつきりにはさせませんわ!）」

3人は約束を交わすと、夕食を食べ終えて部屋に戻った。

竜馬・箒の部屋

「そうだ。箒、コレを持ってて」

2人は部屋に戻ってくると、竜馬は緑色のカンドロイドを箒に渡した。

「ん？このカンドロイドは何だ？」

「用事で遅くなったりしたら、それで連絡して」

「ほう。連絡手段に使うカンドロイドか…」

【B A T T A K A N】

筭はカンドロイド……バッタ・カンドロイドを起動すると床でピヨンピヨンと跳ねた。

竜馬はバッタ・カンドロイドを手にとると、オーバーズのメダルをバッタ・カンドロイドに当てた。

「これで僕のプライベート・チャンネルとリンクしたから、いつでも連絡ができるよ。はい」

「そうか。その……ありがとう……」

「ふふっ。どういたしまして」

コンコン、コンコン

「ん？誰だろ……」

竜馬はノックの音に気付くと扉を開けた。

「ヤッホー、龍東くん」

「相川さん。どうしたの？」

扉を開けると、そこには清香がいた。

「実はね……1組全員は食堂に集合って言われてるから、準備が終わったら来てね。それじゃ、私は先に行くね」

清香は手を振りながら去っていった。

「どうしたんだ？」

「なんか1組は食堂に集合だって」

「そうなのか。では、行くとするか」

「ああ。行こうか」

2人は部屋を出て、食堂に向かった。

夜 食堂

「というわけでっ！龍東くんクラス代表決定おめでとう！」

「「「おめでと〜！」「」「」

パン、パンパーン！

「……………えっ？」

食堂にやってきた竜馬は、突然のクラッカー乱射に啞然とした。食堂には確かに1組のメンバーが揃っており、壁にはデカデカと《龍東 竜馬クラス代表就任パーティー》と書いた紙がかけていた。

「さあさあ！主役はこっちに座ってね。あとコレね」

クラスの1人が竜馬を上座に座らすと飲み物を渡した。竜馬の両隣には箒とセシリアが座っていた。

「いやー、これでクラス対抗戦も盛り上がるねえ」

「ほんとほんと。ラッキーだったよねー。同じクラスになれて」

各自飲み物を手にやいのやいのと盛り上がっている中、竜馬は辺りを見渡した。

（明らかにクラスの人数が多過ぎるなあ……。あっちにいるのって2組の人だし……）

「人気者だな、竜馬」

竜馬の隣にいた箒が話し掛けたが、少し不機嫌そうにしていた。

「ん？どうだろうなあ……。男がクラス代表になったから珍しがってるだけじゃないかな？」

そう言つて竜馬はジュースを飲んだ。すると、竜馬に近づく女子がいた。制服には黄色のリボンをしていたので、2年生だと分かった。

「はいはい、新聞部です。話題のイケメン新入生、龍東 竜馬君に特別インタビューをしに来ました〜！」

新聞部が来た事にクラス一同は盛り上がった。

「あ、私は2年の黛 薫子。新聞部副部長やってます！はいこれ名刺」

「あ、これはどうも……」

「ではではズバリ龍東君！クラス代表になった感想を、どうぞ！」

薫子はボイスレコーダーをずっと竜馬に向けて、無邪気な子供のように瞳を輝かせた。

「えーと……な、なつたからには、優勝目指して頑張ります！」

「お！いいね〜。捏造のしがいがあるよ」

（本人の前でスゴイこと言うなあ……）

そう思ふなか、次に薫子はセシリアにボイスレコーダーを向けた。

「それじゃあセシリアちゃん。龍東君と試合した時のコメントちょうだい」

「わたくし、こういったコメントはあまり好きではありませんが……」

…仕方ないですわね」

と言いつつ、セシリアは満更でもなかった。

「コホン。ではまず、わたくしが　「ああ、長そうだからいいや。写真だけちょうだい」　って！さ、最後まで聞きなさい！」

「いいよ、適当に捏造しておくから。よし！龍東君の強さに惚れたからってことにしよう」

「なっ、な、ななっ……！？」

薫子の一言に、セシリアは顔をボツと赤くなった。薫子は気にすることなく、懷からデジカメを取り出した。

「はいはい、とりあえずふたりならんでね」。写真撮るから」

「ん？」

「えっ？」

2人は薫子の言葉に反応した。しかし、セシリアはどこか喜色を含んで弾んでいるようにも聞こえた。

「注目の専用機持ちだからねー。ツーショットもらつよ。あ！握手とかしてるといいかもね！」

そう言いながら薫子は竜馬とセシリアの手を引いて、そのまま握手まで持つて行った。

「あ……………」

握手をすると、セシリアは頬を赤くして竜馬をジロジロと見た。

「?どうしたの?」

「べ、別に、何でもありませんわ」

「……………むう」

それを見ている筈は、不機嫌オーラ垂れ流しだった。

「……………筈?」

「何でもない」

そう言つて、筈はそっぽを向いた。

「それじゃあ撮るよー。40×13÷1000は?」

「えっと……………0。」「ぶー、時間切れ。0.52でしたー」
「そんな…」

パシャッ

デジカメのシャッターが切られると、竜馬は周りを見た。

「……………みんな凄いなあ」

なんと！1組の全メンバーが撮影の瞬間に、竜馬とセシリアの周りに集結していた。ちなみに、竜馬のすぐ隣には箒が立っていた。

「あ、あなた達ねえっ！」

「まーまーまー」

「セシリアだけ抜け駆けはないでしょー！」

「クラスの思い出になっていいじゃん。ねー」

「「「ねー」「」」

「う、ぐ……」

クラスメートはニヤニヤとした顔で口々にセシリアを丸め込むように言うと、セシリアは苦虫をかみつぶしたような顔をしていた。

「……………？」

竜馬はその様子を見て首を傾げた。

かくして、就任パーティーは夜10時過ぎまで続くのだった。

（翌日）

昼 食堂

「いただきます」

土曜日、午前中の授業が終わって竜馬達は昼食を取っていた。ちなみに、箸はうどん、セシリアはサンドイッチ。そして竜馬は、洋食器に入っているラーメンだった。

「竜馬さん。何故ラーメンをフオークで食べるのですか？」

「セシリア、コレはラーメンじゃないよ。ラ・メインだよ」

「ラ、ラ・メイン…ですか？」

「うん。そもそもラ・メインは　「おっ！見つけたぞ」
…ん？」

食堂にいた生徒は、全員その声の方を見た。そこにいたのは、影宮だった。

「影宮さん。もう来たんですか？」

「まあな。早くオーバースを改修したくて、早めに来た」

「そうだったんだ……」

「ああそれと、コイツ達もな」

影宮は懷から2個カンドロイドを取り出したが、通常とは異なっていた。

1つは、上下が赤と黒のカンドロイド。もう1つは、上下が黒と金のカンドロイドだった。

「起きないマジユ、シベラー」

【【A I K A N】】

影宮はプルタブを開けた。すると起動したカンドロイドは側面に小さな画面が出てくると、両横に小さな腕、底面には小さな足が出てきた。

『（　　）ふぁゝ……。よく寝たぜー』

すると、赤と黒のカンドロイドから声がすると、上には2本の小さな赤いツノが生えて、画面には顔文字が映っていた。

『「　」おはようございます、マスター』

さらに、黒と金のカンドロイドからは後ろに小さな金色の羽が生えて、画面には某爆弾男のような顔が映っていた。

コレが、カンドロイドの中で唯一人間に近い感情を持った高性能A I搭載型カンドロイド……《A I・カンドロイド》の《イマージュ》と《シベラー》である。

「イメージにシベラーまで……」

「んじゃ、俺は先に第1整備室に行くからな。食べたらずぐに来てくれよ」

そう告げると、影宮は食堂を出た。

「第1整備室ね……。そんじゃまあ、すぐ食べ終わらせるか！」

そう言つて、ものの3分でラ・メインを平らげた。

第1整備室

「……………」

竜馬が食堂に出て1時間が経つ。

現在整備室では、影宮とメルダ・ファウンデーションの研究員数名によるオーバーズの改修作業が終盤に差し掛かっていた。

作業の理由は、15枚のコアメダルをオーバーズに取り込む為にバスのスロットの改良、及び拡大をしている。

「……………よっし！作業完了」

影宮はそう言うと、オーバースに取り付けられていた無数のコード
が取り外された。作業が終わると、竜馬はオーバースの空中投影デ
イスプレイを見て驚いていた。

「凄い……武装展開時間が更に短縮されてる。おお！バースCLA
Wsの同時展開が3個から6個全部出来るようになってる！」

「よし、早速テストだ。第4アリーナに向かおうか」

「はい！」

すると、整備室のドアが開かれた。

「やっと終わりましたか」

「あ、セシリア。待たせてゴメンね」

整備室に入ってきたのはセシリアだった。整備室には立入禁止とさ
れていたため、セシリアは待つ事しか出来なかった。

「今から第4アリーナに行くからセシリアも『PRRRR！』

…あつ、箒からだ」

竜馬はプライベート・チャンネルを開いた。

『竜馬か。用事が済んだから今からそちらに行く。何処に行けばよ
い』

「今から第4アリーナに向かうところだよ。改修作業が終わったか

ら、そこで性能テストさ」

『分かった。私もすぐに行くからな』

そう告げると、竜馬は箒のバッタ・カンドロイドの電源を切った事を確認して、プライベート・チャンネルを閉じた。

「んじゃ、行くか」

影宮はそう言うと、第4アリーナへと向かった。

第4アリーナ・ステージ

ステージにはオーバースを展開した竜馬、影宮、ISスーツ姿の箒とセシリアがいた。尚、ピットには千冬と真耶、メルダの研究員達がモニターを見てデータを記録していた。

「それじゃあ竜馬、ドライバーにコアメダルをセットしてくれ」

「分かりました。……………」

竜馬は集中すると、ベルトの溝が輝きだした。

「オーズモードの基本となるメダルは、タカ、トラ、バッタだぞ」

「……………」

竜馬はベルトに集中すると、正面にある3つの溝に赤のコアメダル…タカメダル・黄のコアメダル…トラメダル・緑のコアメダル…バッタメダルがはめ込まれた。

「バースモードと同じ様に、右手をベルトにスライドすればOKだ」

「……………！」

竜馬は右手をベルトにスライドすると、竜馬の周囲に3枚のコアメダルが回った。そして……………

【タカ！トラ！バッタ！　タ・ト・バ！　タトバ　タ・ト・バ！！】

不思議な歌と共に、竜馬は金色の光に包まれた。光が収まると、竜馬はオーバースとは形状が異なる装甲を纏っていた。

身体胸部には円形プレートオーラングサークルの装甲と、頭には小さな赤い羽をモチーフにしたヘッドギア《タカヘッド》が装着され、背中トラアームの装甲には赤い翼状の固定型スラスタバッタレッグが二対あった。更に腕部の黄色い装甲、脚部の緑の装甲が纏っていた。

コレが、オーバース・オーズモード（別名オーズ）の基本形態……オーズ・タトバコンボである。

「な、なんだ？さっきの歌は……………」

箒は先程の不思議な歌に疑問を持つが、影宮は気にせずに行った。

「ああ歌は気にしないでくれ、箒ちゃん。そんなじゃ、早速テスト開始だ。……………ポチツとな」

影宮はポケットから取り出したスイッチを押すと、竜馬の周りに球体のターゲット・ユニットが5体出現した。

「今からユニットを動かすから全て破壊するんだ。ただし、2体は光学迷彩を機能させるからな。……………スタート！」

影宮の合図に全ユニットは動き出し、そのうちの2体は上昇したのちに光学迷彩によって姿を消した。

「……………速いすわね」

セシリアはユニットを冷静に見ていた。ユニットは不規則な起動で素早く動いていた。

「行くよ、オーズ！」

そう言うと、竜馬はスラスターを起動して飛び立った。そのスピードはオーバースに比べると、段違いの速さだった。

『腕に意識を集中すれば、装甲に取り付けられてる武器が使えるぞ！』

「はい！……………っ！」

通信回線から聞こえる影宮の言葉通りに竜馬はトラアームに意識を集中させた。

するとサークルに描かれたトラが光りだして、そこからISスーツに引かれている頭部・四股に伸びているエネルギー流動路がトラアームに注ぎ込まれた。そして両前腕部にある折り畳み式鉤爪状武器が展開された。

「ハッ！」

竜馬はトラクローをユニットに切り付けると、ユニットは爆発を起こした。

『次は脚部だ。脚部はどれも特殊だから、使いこなせば試合でも有利になるぞ』

「了解！……」

竜馬はバッタレッグに意識を集中した。すると、サークルに描かれたバッタが光りだし、ラインドライブがバッタレッグに注ぎ込まれた。

「うおっと！」

すると、バッタレッグの足裏に内蔵されたバーニアが起動して、一気にユニットに近づいた。

「あれは瞬間加速！
イクニッション・ブースト」

箒はその行動を見て驚いた。すると、影宮は動作の説明を言った。

「いや、正確にはショートバーニア・ブーストと言うんだ。足裏のバーニアから発生した圧縮空気が噴出されて、最大3回は使用出来る。緊急回避の他に、相手を踏み付けた時に使えば……」

「成る程！その瞬間に使えば、相手を遠くに弾き飛ばせる！」

箒はそう答えると、影宮は箒を見て微笑んだ。

「せいかゝい！箒ちゃんには1ポイントあげよう。おっ、言ったそばから……」

再び竜馬を見ると、箒が言ったようにユニットがバツタレッグに踏み付けられ、遠くに飛ばされたあと爆発した。

『それじゃ次。各ヘッドはハイパーセンサーの性能を格段に上げるぞ。今から隠れているユニットを探して破壊するんだ』

「分かりました。……………」

竜馬は集中するとサークルのタカが光りだし、ラインドライブがヘッドギアとスラスターに注ぎ込まれた。すると目の前に赤い空中投影ディスプレイ《ホークアイ》を出現させた。見るとそこには光学迷彩を起動しているユニットが見えていた。

「あそこか！」

竜馬はトラクローに集中すると爪が輝きだした。

「ハアアアアッ！」

そして叫びと共に腕を大きく振ると、トラクローから真空波が発生してユニットを真つ二つにして爆発させた。

「よっし！あと2体……」

竜馬は残りのユニットを確認した。1体は光学迷彩を起動していて、もう1体は今までのユニットより装甲がデカかった。

『次は必殺技だ。ドライバーに集中して右手をスライドさせるんだ』

「必殺技？だったらあのデカイ奴に……っ！」

竜馬は意識をベルトに集中して、右手をスライドさせた。次の瞬間

……

【SCANNING CHARGE！】

ベルトから発生された音声と共に、竜馬とユニットの間を赤・黄・緑のリングが出現した。

「ハアアアアアア！」

竜馬は赤・黄・緑のリングを潜り抜けると、ユニットに強力な蹴りタトバキック技を繰り出した。

ドッカアアアアアン!!!!!!

タトバキックを喰らったユニットは巨大な爆発を起こした。

第4アリーナ・ピット

「凄まじい威力ですね。コレだったらシールドエネルギーを一気に削り取られますねえ……」

先程のタトバキックを見ていた真耶は驚いているが、千冬は冷静だった。

（確かに威力は良いが、相手の攻撃で途中中断されたりしたら意味がないな……。まあ、相手の動きを止めたら別か……）

「あ、織斑先生！次は基本武器を使用するみたいですよ」

真耶はモニターを見て言った。すると、竜馬の右手には大剣が握られていた。

第4アリーナ・ステージ

竜馬は大剣をまじまじと見てみると、鞘付近にはセルメダル投入口が備わっていた。

『そいつは《メダジャリバー》と言って、京水が昨日完成させたオーズの基本武器だ。威力は近接ブレード並だがセルメダルを入れてから右手をスライドさせると威力が急上昇するぞ』

「了解！」

竜馬はホークアイに映っているユニットを追い掛けながら、メダジャリバーにセルメダルを2枚セットした。そしてメダジャリバーを右手でスライドさせると……

【DOUBLE！ SCANNING CHARGE！】

メダジャリバーから発生した音声と共に、刀身は青白い光りを発生させた。

「ハアアアッ！」

竜馬はスラスターを最大にしてユニットに近づくと、メダジャリバーを豪快に切り付けてユニットを撃破した。

『よし。これでターゲット全て破壊完了だな。竜馬、いったん降りてこい』

「分かりました」

そう言って、竜馬は影宮達のところに戻った。

「竜馬さん。お疲れ様です」

竜馬が戻ってくるとセシリアと箒が近づいていた。

「やはり凄いな……。違う性能を持ったオーバースを短時間で自分のモノにしてしまうとは……」

「いや。これも影宮さんや京水さん、IS開発局の皆さんが改良したからだよ。ありがとうございます、影宮さん」

竜馬は笑顔を見せて、影宮に感謝を述べた。

「いいってことよ。……次は2対2の実戦テストをしてもらう。箒ちゃん、竜馬と組んで貰えるかい？」

「わ、私でいい」「ちよつとお待ちください！ ムツ」

セシリアに話を遮断されて、箒は頬を小さく膨らました。

「何故わたくしではダメなのですか！ イギリス代表候補生のセシリア」「ああ……箒ちゃんは1ポイント持っているから選んだんだよ。ただそれだけ」え？」

セシリアは思い出した。確かに、箒にはポイントを持っていた。

「で、では……相手には誰を？」

「それは……コイツ達さっ！」

【A I K A N】

そう言いながら、影宮はイメージとシベラーを起動させた。

「2人共、実戦テストを行うから手伝ってくれ」

『（ハハ）了解だぜ！』

『「ハハ」かしこまりました、マスター』

「そんじゃまあ、お前達のユニットを出すか…」

パチンッ！

影宮は指を鳴らすと両隣に2体のユニットが出現したが、ターゲット・ユニットとは全く違った。

1体は紅い装甲をしていて、頭部は白いラインの入ったカブトのような角が特徴で、両腕にはセシリアのスターライトmk?並の長大な砲身が右に2本、左に1本装備された射撃型のユニット。

もう1体は蒼い装甲をしていて、頭部はクワガタの顎のようなバイザーが特徴で、右腕にはソード、左腕にはハンマーが装備された格闘型のユニットだった。

そして影宮はイマージュを紅いユニット、シベラーを蒼いユニットの背中にセットした。

「2人にはコイツ達…… KBT NF:カイゼルと、KWG NF:ルミナスの2体と戦ってもらうぜ!」

「分かりました。箒、がんばろうか!」

「ああ!」

竜馬と箒はカイゼルとルミナスを見て、闘志を沸かせていた。

04話【ドROIDとテストと亜種連発】

第4アリーナ・Bピット

現在、竜馬と篤はBピットにて待機していた。尚、セシリアはルムメイトと約束していたのを思い出して寮に戻っている。

「まさか、竜馬が学園に来るまでに訓練していた相手が《ハーフ・ドROID》だったとはな…」

「まあ、元々メルダは《ドROID》を発明した会社だからね。訓練相手にはよかったよ」

そう聞いた篤は、ステージで出会ったカイゼルとルミナスを思い浮かんだ。

ドROID……メルダ・ファウンデーション会長、白黒が開発した無人A.Iロボットの事であり、医療機関・工場産業・軍事企業等に提供されている。

特に人間と生物を掛け合わせた姿をしているハーフ・ドROIDは軍事企業で訓練機として採用されており、最近ではISとの訓練において最適なユニットである。

「しかしステージに仕掛けを施すと言っていたが、まだなのか？」

「んー…。まだ連絡が来てないから 『おい！』 ……あつ、来た」

するとピットのモニターが起動して、影宮から連絡が入った。

『準備完了だ。そっちはどうだ』

「はい、こっちも準備OKです」

竜馬は箒を見てみると、箒は既に打鉄を装着していた。それを確認した竜馬も、オーバースを展開した。

「行こうか、箒！」

「ああ！」

2人はピット・ゲートに進み、ステージに出撃した。

第4アリーナ・ステージ

ピットから飛び出した竜馬達の前に紅と蒼のユニット……カイゼルとルミナスを動かしているイマージュとシベラーが浮かんでいた。

『お久しぶりですね、竜馬殿……』

「ああ。今日も特訓、よろしくたのむよ」

『御意』

竜馬の言葉にシベラーはコクリと頷いた。

『久々だからって遠慮はしねえぜ！オレは最初っから全開だ！』

一方、イマージュは戦う事で興奮していた。

「箒、作戦の確認だよ。箒にはカイゼルを任せるよ。あのロングライフルは威力は高いけど……」

「分かっている。懷に飛び込めばライフルは使えないしな……」

箒はカイゼルの両腕に装備された長大な砲身を見た。2 mを越す銃火器は、懷に入ればその威力を発揮されない……。故に、竜馬は剣術が得意な箒にカイゼルを当てさせたのだ。

『んっ？何みてんだ侍オンナ！』

イマージュは箒の視線に気付くと、左腕のロングライフルを向けた。

「相変わらず好戦的だ……」

イマージュの様子を見ると、通信回線から竜馬の声が聞こえた。

『今回のルールだ。“タトバコンボと純正コンボ以外を使って闘ってみる”。さあ、ドライバーにコアメダルをはめ込むんだ……』

「（亜種コンボのみか……）了解しました」

竜馬はベルトに集中すると、タカメダル・バッタメダル・そして緑のコアメダル…カマキリメダルをセットして、右手をベルトにスライドした。

「いくぞ！」

【タカ！カマキリ！バッタ！】

音声と共に光りに包まれると、竜馬はオーズの姿になった。だが、先程とは決定に違う箇所があった。タカヘッド、バッタレッグは同じだが、両腕部が緑の装甲になっていた。
カマキリアーム

「今度は歌が流れないな…」

箒はタトバコンボに発声していた不思議な歌を聞いていたが、今回は流れていないのを不思議と思った。

「タトバと純正のコンボ以外は、あの歌は流れないんだ」

「そうなのか…」

「さあ、もうすぐ開始だよ」

2人は話し終わると、イメージユとシベラーに再び向き合った。

『では……………始めっ！』

影宮が宣言するとシベラーは前進し、イマージュは上昇した。

『シベラー・ルミナス……参ります!』

『イマージュ・カイゼル……撃ちまくるぜ!』

イマージュは右腕のツインロングライフルを竜馬に撃ったが、竜馬はショートバーニアで加速してシベラーに迫った。

「まずは……カマキリだ!」

両腕のラインドライブが輝き、竜馬はそれを注ぎ込んだ。すると、両前腕部に装備されているブレード《カマキリソード》を展開して逆手持ちでシベラーに切り掛かった。

『なんのっ!』

シベラーも右腕のソードでカマキリソードを受け流すと、左腕のハンマーで殴り掛かった。

「よつと!」

だが竜馬は右足でハンマーを蹴り飛ばすと、左足でシベラーを踏み付けた。

『ぐあっ!』

踏み付けた瞬間バーニアを発動させて、シベラーを弾き飛ばした。

『何やってんだシベラー!』

イマージュは再び竜馬を狙おうとした。

「させるかあっ！」

『なっ！いつのまにっ！』

しかし箒がそれを阻止しようと、刀型近接ブレードで切り掛かった。

「（懐に入った！）これで……………っ！！」

懐に入ろうとした瞬間、箒は左から来た衝撃によって真横に飛ばされた。

『残念だったな侍オンナ！長大な銃火器が懐に弱いのは、大昔のことだ！』

そう…………イマージュは懐に入れそうになった瞬間、左腕のロングキャノンの砲身を横に振って箒を飛ばしたのだ。

「これでは迂闊に入り込めないか…」

『では、ワタクシがお相手しましょう…』

「ッ！」

飛ばされたシベラーは箒に目標を変えると、イグニッション・ブーストを起動して一気に距離を詰めた。

「逃がすか！」

竜馬はバッタメダルとカマキリメダルを、青いコアメダル…ウナギメダル・黄色のコアメダル…チーターメダルに変更して右手をスライドした。

【タカ！ウナギ！チーター！】

すると、カマキリアームとバッタレッグが変化した。
両腕部は青い装甲、ウナギアーム脚部は黄色の装甲チーターレッグに変更された。
竜馬は脚部にエネルギーを送り込むと、太腿部分に付けられているマフラーからスチームが吹出し、ものすごいスピードでシベラーに追い付いた。

「待てっ！」

『なんという推進力！これがコアメダルの力ですか……』

シベラーが関心するなか、竜馬は両肩に装着された武器《電気ウナギウィップ》を取り出してシベラーに巻き付けた。

『なんとっ！』

「捕まえた！ウオオオッ！」

竜馬は力いっぱい電気ウナギウィップを振り回すと、シベラーをイマーシュに向けて投げ飛ばした。

『ちよちよちよ、こっちくんぐはっ！』

2体はぶつかって下降していくが、地表スレスレのところで姿勢制御をして地面に着地した。

「よし、いまなら!」

箒はシベラー達を追撃しようと地表に降り立った。

ドツカアアアアン!

「なっ……うわっ!」

地表に降り立った瞬間、爆発が起こった。

「箒!」

竜馬は箒と同じ場所に降り立つと、イメージュ達に目を向けた。

『掛かりましたね。このステージ帯には、ISしか反応しない《ランドマイン》を仕掛けていますよ!』

『オレ達はドロイドだからランドマインは反応しねえ仕掛けよお!』

イメージュはそう言うと、両腕による乱射を行った。

「くっ!箒、一度離れよう」

「あ、ああ……」

2人はその場から急上昇して、弾丸の雨を避けた。

「厄介な仕掛けだなあ……」

竜馬はホークアイでステージを見渡すが、ランドマインは探知出来なかった。

「どうする？ 地表に降りると、また爆発を喰らうぞ」

「……………おっ！ この組み合わせなら……」

竜馬はコアメダルの情報をディスプレイで見ていると、銀のコアメダル…サイメダルとゾウメダルの情報に目を向けた。

『おいシベラー。追い掛けなくていいのか？』

『追い掛けたところで2対1になるのがオチです。ここは、相手が接近したら仕掛けましょう……』

『分かったよ。お、噂をすればだ……』

イメージは見ると、竜馬達が再度接近していた。

『では、ワタクシは篠ノ之殿を……。イメージは竜馬殿を頼みます』

シベラーは箒に向かって飛び立った。

「それじゃあ箒、足止めの方を頼むね」

「ああ！……しかしそれで爆弾を把握出来るのか？」

「ああ、僕を信じて！」

竜馬はタカメダルとチーターメダルを変更すると、サイメダルとゾウメダルに変更して右手をベルトにスライドした。

【サイ！ウナギ！ゾウ！】

竜馬は頭部と脚部を変更した。

頭部は白銀のヘルメットにサイのような巨大な角が1本付いている
《サイヘッド》に、脚部は黒い装甲ソウレグに変わっていた。

「ハアアアッ！！」

竜馬はサイヘッドとゾウレッグにエネルギーを送り込みながら、そのまま地表に急降下した。

ズドオオオオン！！

その瞬間、ゾウレッグによって巨大な地響きがステージに起こった。

『わっ！とっ！とっ！』

ステージに立っていたイマージュは大きな揺れによって体制を崩した。

「……見つけた、ランドマインの位置！」

竜馬はオーズから送られた地形情報を見ると、十数個の光り……ランドマインがあった。

ゾウレッグによる踏み付け技によって振動波を起こし、サイヘッドスオーストップの角が跳ね返った振動波をソナーのように感知して、ランドマインの場所を見つけたのだ。

「危ないモノは先に潰す！」

竜馬はサイメダルとウナギメダルを、緑のコアメダル…クワガタメダル・赤いコアメダル…クジャクメダルに変えてスライドした。

【クワガタ！クジャク！ゾウ！】

すると、サイヘッドとウナギアームは変化した。

頭部には、クワガタの顎をモチーフにしたアンテナ《クワガタヘッド》と両肩の後ろに垂れ下がった緑の巨大なツノのアンロック・ユニットを各1本ずつ形成しており、両腕の装甲は赤く左腕に手甲型エネルギー解放器が装備された《クジャクアーム》に変更された。

「ハアッ！」

竜馬はタジャスピナーをランドマインが埋まっている方に向けて、タジャスピナーはエネルギー弾を発射してランドマインを爆発させた。

『喰らいやがれっ！』

イマージュは銃口を向けて撃ってきたが、竜馬は急上昇しつつ巨大なツノにエネルギーを送り込んだ。するとツノは展開して、ツノの先が上を向いた事によってクワガタの顎のようになった。

「お返したっ！」

竜馬はツノの先っばから電撃を発生させて、イマージュに放った。

『アババババババッ！』

イマージュは電撃をもろに喰らってしまい、一時的に行動が停止してしまった。

「また動くようだけど……」

竜馬は上を見上げると、箒とシベラーが激しい戦いをしていた。

「でえええい！」

『ハアアアッ！』

箒の刀とシベラーのソードが互いにぶつかり合い、火花を散らしていた。

『流石は篠ノ之流……なかなかの腕ですね』

シベラーは一度間合いを取ると、箒は息を整えて再び構えた。

「いや、私はまだまだ修行が足りない。もっと強くなって……」

すると箒は、ちらつと竜馬の方に目を向けた。その時、若干頬は赤く染めているのをシベラーは見ていた。

『……成る程。しかし、竜馬殿は鈍感ですよ……。それも超のつく程の方です』

「っ！そ……それは……」

箒は一瞬驚くが一度目を閉じて直ぐ開くと、その瞳には決意が宿っていた。

「それでも、竜馬の隣に立ちたい！これからも……その先も！」

言い終わると、箒はシベラーに突っ込んで行った。

『フフッ…。応援しますよ、篠ノ之殿！』

同じく、箒を迎える為シベラーも突っ込んで行く……………その時だった。

「はあっ！」

ビュンッ！

「何っ！消えた！」

箒は確かにシベラーを切り付けた。だがその感触は無く、シベラーは消えていた。

「いったい何処に……………っ！」

その時、箒は後ろに気配を感じると刀を横に薙ぎ払った。

ガギンッ！

「…光学迷彩か」

ぶつけた音が響くと、箒の目の前にシベラーが徐々に姿を現した。

『ほう……ルミナスのオールオーバーを見破るとは……』

「オール…オーバー？」

『御意』

シベラーはまた離れると姿を消した。

「ちっ……また消えた」

箒が言い終わると、何処からかシベラーの声が聞こえた。

『このルミナスが持つ機能です。ハイパーセンサーに反応しない完全隠蔽機能……』

箒はハイパーセンサーを最大にするが、シベラーを見つけれなかった。

『参りますっ！』

「っ！」

その言葉を開始に、箒はいくつもの攻撃を加えられた。

『これで……最後です！』

オールオーバーを起動しているシベラーは、箒の後ろに回り込み突っ込んできた。

「させないっ！」

『何……うおっ！まぶしい！』

シベラーは声の方を見ると強烈な閃光が目に入ってしまい、オールオーバーが解除してしまった。

「今だ……箒！」

「竜馬……！うおおおおっ！」

箒は姿を現しているシベラーに刀で切り付けると、シベラーの推進部に当たって徐々に下降していった。

「ナイス、箒！」

「竜馬……。その装甲はなんだ？」

箒は竜馬を見ると、頭部の装甲とユニットが変化していた。頭部には黄色いヘッドホンに水色のサングラスが付いている《ライオンヘッド》に、両肩横に浮かんでいる左右非対称のアンロック・ユニットが形成されていた。ちなみに、右は外側がギザギザな形のリング型ユニット、左は獣の顔型のユニットになっている。

「ああ……オールオーバーは確かに強力なステルスだけど、強烈なエネルギーを浴びせると機能を止めるんだ。だから、このコアメダルならいけると思って……」

竜馬は黄色いコアメダル……ライオンメダルを指差した。

「…これでテストは終了だな。2体は戦闘の続行が　「いや、ただだよ」　…え？」

竜馬は箒の言葉を遮ると、下に目線をやった。箒は竜馬が見ている方を見ると、シベラーがイメージユに近寄っていた。

『大丈夫ですか、イメージユ…』

シベラーは若干電気を帯びているイメージユに近づくと、イメージユはゆっくりと言った。

『…まだ…痺れるけど……何とかな……』

『ワタクシは推進部をやられました…』

『…んじゃ、いっちょ“アレ”でもすつか？』

『“アレ”…ですか……。良いでしょう』

シベラーの言葉にイメージユはカイゼルの背中から出て、AI・カンドロイドに変形した。

『（…）もつと暴れたかったけど、仕方ねえ……。オレは一足先に戻るぜ…』

そう言いながら、イメージユはその場から転送されて戻った。

『……来ましたか』

シベラーが振り向くと、竜馬と箒がすぐ近くに停滞していた。

「シベラー……、次はどうするの？」

竜馬は次に来る事を知っていたが、あえてシベラーに向かって聞いた。

『今のワタクシは速く飛べません。しかし……』

シベラーは指を弾くと、カイゼルから音声が届いた。

【認証信号確認。カイゼル、変形展開を開始】

「来る！」

「なっ！竜馬！」

竜馬は箒の前に回ると、箒の腕を掴んで抱き寄せた。そして、そのままゾウメダルを青いコアメダル…タコメダルに変えてスライドした。

【ライオン！クジャク！タコ！】

すると、ゾウレッグは青い装甲の脚部タコレッグに変わり、エネルギーを注ぎ込んだ。その時だった……

「飛ばされないで！」

「あ、ああ！」

シベラーはカイゼルと共に光りに包まれると、強烈な暴風が発生して竜馬達を襲った。

しかし竜馬がタコレッグにエネルギーを注ぎ込んだ事で、地表でも空中でもその場所に留まる事が出来る《オクトスパイク》が発動していた。

「……おさまったようだね」

竜馬は暴風がおさまった事を確認すると、箒に話し掛けた。

「……箒？」

竜馬は返事をしない箒を見ると、箒は顔を真っ赤にしていた。

（り、竜馬……せ、積極的過ぎるぞ！ まま……ま、まだここ心の準備ががが……！）

「……大丈夫？」

「っ！ あ、ああ……。助かったぞ、竜馬」

「これくらい……ね。でも、もうすぐ終盤だ……」

竜馬はシベラーの方に目をやると、シベラー……もといルミナスはカイゼルの装甲を身に纏い空中に停滞していた。

『ルミナス、カイゼル・アームズとの合体を確認しました。……………お待たせ致しましたね、竜馬殿』

「いや、何となくそれをすると思ったよ。それに、僕が使っていないコアメダルも残り3枚だしね……」

そう言うと、竜馬はベルトのコアメダルを全て変更した。ライオンメダルを青いコアメダル…シャチメダルに、クジャクメダルを白銀のコアメダル…ゴリラメダルに、タコメダルを赤いコアメダル…コンドルメダルに変更してスライドした。

【シャチ！ゴリラ！コンドル！】

ベルトから音声がり終わると、全ての装甲が変更された。

頭部は背鰭のような突起と2個のライトが付いているヘッドライト《シャチヘッド》と背中^{ゴリバコーン}に2本のボンベとホースが形成していた。

更に両腕は巨大なガントレット状^{ゴリラアーム}の武器が装着された銀色の装甲に、脚部の装甲には爪先と踵に金色の爪と《ラプタードエッジ》^{ストライカーネイル}が備わっている《コンドルレッグ》に変更されていた。

『おい竜馬！』

「影宮さん？」

すると、プライベート・チャンネルから影宮が話し掛けてきた。

『今、使ってるコアメダルが最後だな。さっき京水から送られた武器をオーバースにインストールしたから、使ってみな…』

言い終わると、竜馬の目の前に送られた武器情報が送られた。だがそれを見て、竜馬は知っていた。

「《ライドベンドー》！」

そう…可変型自販機ライドベンドーだった。

『自動操縦可能だってよ。まあ使ってみてくれ』

「分かりました」

影宮は通信を切ると、次に箒に通信回線を開いた。

『箒ちゃん。もうすぐ終わるところで申し訳ないけど……、箒ちゃんはその場で待機してくれ』

「何故ですか？まだ私は戦えます…」

『今から高速戦闘に入るからな。その打鉄じゃあ無理だろうっねー』

「そ、そうですか…」

そう言われて、箒はしょんぼりとした。

『……お話は済みましたか？』

一方、シベラーは竜馬達が影宮との通信を終わらせるのを待っていた。

「ああ。待たせたね」

竜馬はすぐ横にベンダーを呼び出すと、セルメダルを投入してバイク形態にした。

『では……行きます！』

シベラーはカイゼルの大型ブースターを起動すると、ものすごい速さで飛び立った。

「こつちも……行くかな！」

竜馬もライドベンダーに乗ると自動操縦にしてシベラーを追い掛けた。

（竜馬……）

第はその様子を見て、空を見上げていた。

第4アリーナ・Aピット

「いい具合だな…」

一方、Aピットにいる影宮はオーバーズのデータを取っていた。

「……………」

しかし、千冬はモニターに映る竜馬を見て考えていた。

（あれほどの装甲を変えるIS……聞いた事がないな。さらにメダルの組み合わせで戦況を有利に進める技術と戦い方……。竜馬、お前は……）

すると、千冬は2年前を思い出していた。…竜馬と数年ぶりに会った懐かしさと、竜馬に起こった暗い過去を……。

「…織斑先生？」

「……！ああ、どうしましたか？山田先生……」

千冬は真耶の言葉に気付くと、真耶は話し続けた。

「大丈夫ですか？何か考え事をしていたみたいですけど……」

「大丈夫だ。それより、何か動きがあるようだ」

千冬は再びモニターを見ると、シベラーが高速で竜馬に突進をしていた。だが竜馬は回避すると、後ろに回り込んだ。

「あのスピードを何とかしないと、竜馬は勝てんな」

千冬はコーヒーを飲みながら、モニターの竜馬を見た。

第4アリーナ・ステージ

「くっ……やっぱり速いな……」

現在竜馬はシベラーの後ろにいたが、シベラーのスピードに付いてくのがやっとだった。

「何かないか……」

竜馬は装着しているコアメダル情報を調べていると、シベラーのスピードが上がって竜馬を引き離した。

『この距離なら……』

シベラーは直ぐさま反転し、両腕の銃口を竜馬に向けて撃ってきた。

「うおっ！」

だが竜馬は回避すると、一旦距離を取った。

「ふう……危なかったなあ……ん？」

すると、竜馬はディスプレイに映っている情報を見た。

「シャチメダル……。成る程、やってみる価値はあるか……！」

情報を読み終えた瞬間、竜馬は反転してシベラーに突っ込んで行った。

『何か仕掛けますか……だったら、返り討ちにするまでです！』

それを見たシベラーも、竜馬を迎え撃つため突っ込んだ。

『ハアアアアアッ！』

ぶつかる間際、竜馬はシベラーのすぐ横を通り過ぎるその時だった。

「……今だ！」

直ぐさま竜馬はポンベにエネルギーを送り込むと、ホースから水が噴出してシベラーに浴びせた。

『水？そのような攻撃でワタクシがやられるとでも……』

「……フッ」

『……？なにを……。ッ！』

竜馬は笑みを見せた瞬間、シベラーは異変を感じた。

『何っ！全システムが機能低下！ブースター、オールオーバー、更にライフルが使用不可！……………あの水か！』

シベラーは急な事態に慌てたが、異常の原因をすぐに見つけた。

「凄い効き目だな、この《カムイ》って…」

竜馬はホースを握りながら、シャチメダルに載っていた情報を思い出す。

カムイ……ボンベに入っているナノマシン入りの水で、相手に浴びせるとシステム障害を起こしたり、武器や特殊武装等を使用不可能にする特殊機能である。

「今がチャンス！」

竜馬はライドベンダーから飛び降りると、シベラーの懐に向かって行った。

『ッ！甘いですよッ！』

シベラーは懐に入られそうなところで、右腕の砲身を横に降って竜馬にぶつけようとした。

「それは効かないよ！」

だが竜馬はコンドルレッグにエネルギーを送り込むと、左足を蹴り上げて爪先にあるストライカーネイルで砲身を真っ二つに切り落とした。

『くっ…!』

「まだまだあ!」

更に、右足を踵落としの要領でラプタードエッジから真空波を放ち、シベラーの左腕の砲身を根元から切り落とした。

『ぐあっ!』

「これで最後!」

竜馬はシベラーを踏み付けて落下させると、ベルトに集中してからスライドした。

【SCANNING CHARGE】

音声の後、竜馬は輝きを放っている両腕をシベラーに向けて前にだすと、装着されていたゴリバゴーンはロケットパンチのように射出する《バゴーンプレッシャー》を繰り出した。

『ぐあああっ!』

シベラーはバゴーンプレッシャーに直撃すると、ルミナスの背中からシベラーは出てきた。

「よっと…」

竜馬はシベラーをキャッチすると、ルミナスは機能を停止して地表に落ちる瞬間転送された。

『「Ｔ　Ｔ」参りました…』

「……ふう。影宮さん、終了しました」

『ご苦労さん。ピットに戻って来てくれ』

竜馬は指示を受けると、簾のもとに向かった。

夕方　寮

第４アリーナでの性能テストを終えて、竜馬と簾は部屋に向かっていた。

「ふう……やっと終わったあー」

竜馬は背伸びをしていると、結果を思い出していた。
性能テストの結果……。

「コアメダルの機能がある程度使い熟してたな。もっと戦って、デ

「タをたくさん取ってくれ！」

……と、影宮が言っていた。

「箒、今日は一緒に戦えて楽しかったよ」

「そ、そうか。それはなによりだ」

「…箒、顔が赤いけど大丈夫？」

「だ、大丈夫だ！ほら、部屋に入るぞ…」

真っ赤な顔をした箒は、自分達の部屋に入った。すると……

『「――」お帰りなさいませ、竜馬殿、篠ノ之殿』

竜馬の机の上に、シベラーがいた。

「シベラー！どうしてここに？」

『「――」今日から竜馬殿と共にいると、マスターから任務を与えられました。ですので……』

『「――」今日から、よろしくお願いします』

シベラーは竜馬達に頭を下げると、竜馬は近づいていった。

「そうだったんだ。こちらこそ、今日からよろしく」

『「――」はい――』

竜馬はシベラーと握手すると、親友の証をした。

「私も、今日からよろしくだな」

『「はい！篠ノ之殿もよろしくお願いします」』

『「—く」竜馬殿の事、頑張って下さいね』

「なっ！」

シベラーはウインクをしてから言うと、箒は顔を赤くした。

「ななな、何を言うんだ！」

バシッ！

『「ひでぶっ！」』

ドコオン！

「……あ」

箒は恥ずかしさのあまり、シベラーにビンタをして壁に減り込ませてしまった。

「シ、シベラー！」

そして、竜馬の叫びが寮内に響いた。

04話【ドroidとテストと亜種連発】（後書き）

とりあえずコアメダル15枚を一気にだしました。

コアメダルの詳しい性能は、IS設定で記載しておきます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6059x/>

I・O・O・S インフィニット・オーズ・ストラトス

2011年11月4日15時25分発行